

教職員・学生のための広報紙

医歯大ひろば

No. 81 平成12年12月



冬も緑に燃えて

マイ・リサーチ

- 本文より -



インドネシア、カリマンタン島の子どもたち、うんちが流れている川で遊ぶ子どもたちは明るく、肌がつやつやしていた。
(関連記事本文12ページ)



サルの花粉症は昔から一定の割合です。
(関連記事本文12ページ)
大学院医歯学総合研究科 国際環境寄生虫病学分野 藤田 紘一郎教授

目次

□教授就任挨拶	3
□国際交流	4
中国・長春・白求恩医科大学 口腔医学院訪問	
□公開講座	6
公開講座報告 教養部	
□News	8
亀井自民党政調会長ら一行が本学を視察	
□教養部ってこんなところ	9
教養部雑考	
□シリーズ人間科学教育	10
□マイ・リサーチ	12
藤田紘一郎教授，日置俊次助教授	
□海外レポート	14
市川 度助手，福岡 豊助教授	
□外国人留学生だより	16
ジャネットィ アスリィ，ジャワルディナ	
□学生部だより	18
□健康コラム	42

表紙の言葉

国府台キャンパスの松の木です。後ろにヒポクラテス・ホールが見えます。JR市川駅から国府台に向かう真間の大門通りは、大昔は美しい松並木で有名でした。三本松，一本松などの地名にも残っているように、このあたりには立派な松が多いのです。ところが最近開発が進み、松の大樹が次々と切られています。とても残念です。国府台キャンパスのこの松も、いずれは切られる運命にあるのでしょうか。また松の伐られし街の師走かな

写真・文 日置俊次（教養部助教授）

教授就任挨拶

大学院医歯学総合研究科 生体環境応答学系専攻
感染応答学講座 感染分子制御学分野

教授 烏山 一
からす やま はじめ



この10月より感染分子制御学分野を担当させていただくことになりました。昭和53年の学部卒業以来実に22年ぶりにもどった母校で、大きく変わったところに驚かされ、逆に全く変わらないところでは懐かしさとともに歯がゆさも覚え、まだ興奮冷めやらない状況です。

卒業後、筑波大学付属病院での2年間の臨床研修を通じて免疫学の重要性を強く感じ、東京大学医学部免疫学大学院（当時、多田富雄教授）に進んで以来、2度にわたるスイス・バーゼル免疫学研究所での研究生生活を含め、一貫して免疫学の研究に従事してきました。免疫学は基礎医学分野のひとつではありますが、自己免疫疾患、アレルギー、免疫不全症はもちろんのこと、エイズをはじめとする感染症、がん、そ

して臓器移植などさまざまな臨床的な局面で免疫が顔を出し、免疫が関与しない疾患はないといっても過言ではありません。自己と非自己の識別、記憶、寛容など哲学的・文学的ともいえる免疫の事象が、近年の基礎免疫学の急速な進歩により分子レベル、遺伝子レベルで語れるようになりましたが、残念ながらまだ疾患治療への実用的応用というレベルにまでは到達していないのも事実です。基礎、臨床を問わず、広く先生方のお力添えをいただき、また若い学生たちの意欲とエネルギーを結集して、微力ながらすこしでも医学に貢献できる研究を展開することができればと考えております。ご指導、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

難治疾患研究所 機能・調節疾患研究部門
(分子細胞生物学)

教授 しば や ひろ し
しは や ひろ し



TAK1というTGF- β シグナル分子との出会いは7年ほど前でした。名古屋大学の先生のところを取れた分子の機能を調べるところから始まりました。それまでレポーターアッセイという遺伝子のプロモーター領域を利用した方法を得意としていたのでいろいろな遺伝子のプロモーターで確認しましたが、これはうまくいきませんでした。その頃たまたま赴任した北海道大学の研究室がBMPという細胞増殖抑制因子TGF- β ファミリーのシグナル関係の仕事をしていたので、それまで知らなかったTGF- β 呼応性の遺伝子を手に入れ、試してみました。これが見事にあたり、TAK1という分子が地位を得たのです。もしも北海道大学の研究室に来ていなかったら、おそらくこういった実験はし

ていなかったと思えます。

最近TGF- β やWntシグナルの相乗的な効果を分子レベルで解明し、報告することができました。あるTGF- β シグナル分子とWntシグナル分子が複合体を形成し、Wntシグナルの活性化において中心的な役割を演じているという内容です。この実験の始めの発想は別のテーマでの共同研究からWntシグナル分子が手元にあったから試ただけのことでした。こういったちょっとした考えをすぐに実行してしまうことが大事であると改めて感じています。

本年9月より難治疾患研究所分子細胞生物学分野に赴任して参りましたが、今後新たな人そして分子と出会い、新たな研究の展開を期待しつつ、頑張っていきたいと思っております。

中国・長春・白求恩医科大学 口腔医学院訪問

大学院医歯学総合研究科 硬組織薬理学分野
教授 大谷 啓一

本学歯学部と姉妹校協定を結んでいる中国・長春・白求恩医科大学（Norman Bethune University of Medical Sciences）口腔医学院を訪問（2000年9月24日～28日）し、学术交流を行った。以下その内容について報告する。

長春は中国吉林省の省都で旧満州国時代には「新京」と名付けられた首都であった。現在もその当時建築された威厳のある建物が多く残っている。特に白求恩医科大学の基礎医学部門は日本の国会議事堂を思わせる建物内にあり、内部はいささかくたびれているものの大変立派であった（写真1）。長春郊外には自動車工場があり中国の自動車産業の一大中心地でもある。通りには独フォルクスワーゲン社のライセンスにより作られた車が道を目一杯走り、人、自転

車がそれに加わって、その流れを見ているだけで目が回ってしまいそうであった。

長春は吉林大学を始めとする多くの大学が集まり多数の学生が暮らす文教都市でもある。特に吉林大学は数カ所のキャンパスに分かれており、どの学部も広大な土地に近代的な立派な建物が建てられており感心した（写真2）。2000年9月より白求恩医科大学・口腔医学院は吉林大学の一学部となり大学としての再編が進行中であった。

さて白求恩医科大学・口腔医学院では、歯学部部長の高先生、病理学講座の孫先生らに熱烈歓迎を受けた。到着の翌日9月25日には今回の交流目的のひとつである第3回中国口腔医学教育学会の特別講演を「東京医科歯科大学におけるITへの取り組み」の演題名で行った。本学のインターネット、視聴覚機材活用の現状を話した後、現在試みられている学部学生への情報教育への取り組みを解説した。さらにメディア教育開発センターのSCS（スペース・コラボレーション・システム）について解説し、本学が他大学と行っているSCSセミナーによる交流事業について述べた。また将来、時差の少ない中国とSCSを利用して授業交換などを行う可能性についても言及した。また、日本のインターネット接続の現状を紹介し、大学教育へのIT技術活用の取り組みについて紹介した。中国・口腔医学院におけるインターネット等情報技術への取り組みは活発に行われていないようであり、参加者からの反応はいまひとつと感じられた。

引き続き午後には、口腔医学院の学生、教官に対して「Pharmacology of Hard Tissues」のタ



写真1 中国 白求恩医科大学 基礎医学部門の建物前にて。後の像は大学創設者の Dr. Norman Bethune

国際交流

イトルにて講演を行った。内容は代謝性骨疾患への薬物開発の現状を述べて、骨 remodeling 機構がその際の基礎的認識事項として研究進展に重要であることを解説した。また歯科領域における硬組織疾患への新規薬物応用の可能性についても述べた。講演は日本語で行うよう要請され、それを中国語に通訳して行ったが、当然通常の2倍の時間がかかり、内容の理解がなかなか進まなかったため、黒板を使用して詳細に解説を行った。講演が2時間を経過した時点で打切り、残りは翌日に行うこととした。

翌日（9月26日）は午前中に口腔病理学講座の勉強会形式で残された内容の講演を行った。今回の話は英語で行い、中国語への通訳を介した。大学院生の中に講演内容をよく理解する人がいて、活発な質疑を行うことができた。中国側の学術面での支援希望としては、現有の設備内で使用できる研究材料、手段（PCR、ISH用のプローブなど）の提供を望んでおり、今後医歯大側としてできうる限りサポートすることを約束した。

白求恩医科大学口腔医学院は今後の発展を模索中で、学術・臨床面での進歩を画策している。その計画の一環として本学へ博士課程の大学院生等の派遣を希望しており、数カ月の滞在である程度の学術研究を行い、その後は両者で研



写真2 吉林大学のキャンパスにて。真中・筆者、右側・今回の訪問のホストである孫先生、左は通訳などお世話になった林先生。

究・指導を行って学位を取得したいとのことであった。この点に関しては協力する旨伝えた。

中国の歯科全体に関して、口腔医学教育学会参加者との交流から得た印象では、主に臨床中心の学術活動を行っていて、基礎系の学術研究は不十分なようであった。また歯科への保険制度などが未整備なことが原因の一つであると思われるが、歯科医学研究への資金的な裏付けが不足しているようであった。

最後に、今回の訪問に際してお世話になった方々に感謝すると同時に、今後さらに活発な学術交流を行い、本学が白求恩医科大学（吉林大学）口腔医学院の発展に貢献できることを期待したい。

公開講座報告

今年も8月16日から25日までの間、東京医科歯科大学・教養部公開講座が開催されました。教養部の公開講座の歴史は古く、昭和49年に開催されたスポーツ公開講座（ちなみに、この年は水泳（母と子、一般成人向け計3講座）と硬式テニス（中学生以上1講座）が開催されました）にはじまり、今年で早26年目を迎えています。近年の公開講座はもっぱら次世代教育を考え、対象は小・中学生中心で、今年にはスポーツ公開講座（水泳教室Ⅰ，Ⅱ）と子供自然科学講座A，Bが開催されました。

スポーツ公開講座（水泳教室）

教養部 保健体育学
助教授 水野 哲也



今年も8月16日（水）～23日（木）土日を除く6日間、恒例のスポーツ公開講座（水泳教室）が行われ、無事終了することができました。

さて、振り返ってみますと、この教室も早26年目を迎え、今年でその受講生の総数がなんと2700名を越えました。これもひとえにこうした活動に平素よりご理解、ご協力そしてご尽力下さる教養部事務方そして本学水泳部員、さらに地域の方々のおかげと心より感謝申し上げる次第です。この講座も対象はもっぱら市川市在住者ということですが、これまでさまざまな方が参加されており、以前は水泳も「母と子」、

「一般成人」、 「小中学生」、硬式並びに軟式テニスも「初心者」、 「初級者」、 「中級者」と年齢、性別を問わず多くの方々が本学のプールやテニスコートで健全な汗を流されるとともに、ふれあいの輪を広げてゆかれました。最近では地域内のスポーツ施設の充実が図られ、「水泳教室」特に小・中学生を対象としたプログラムが中心となり、今年も写真のように教職員スタッフ、学生そして子ども達等一体となって楽しく、充実した時間を過ごすことができました。

今後も微力ながら、こうした活動を通して地域とのふれあい、交流を深めるとともに、次世代を担う子供達の健全な成長に貢献してゆきたいと考えております。皆様、何卒よろしくお願い申し上げます。



公開講座

夏休み子供自然科学公開講座

教養部 生物学
教授 服部 淳彦



平成12年8月24日(木)、25日(金)の両日、市川市在住の小学生(高学年)を対象に、子供自然科学公開講座(「なぜ?」から始める理科の自由研究)を行った。この公開講座は、大学開放事業の一環として行っているものである。小学生の理科離れがいわれて久しいが、この公開講座は、生物学と化学の教官が、教養部の学生の協力を得て、小学生に自然科学の面白さを体験してもらうというものである。一方では、本学の学生にとっても、小学生を指導することによって、それぞれのレベルに合わせて教えることの難しさや、身近なものを題材にした自然科学の面白さを、子供を通して感じてもらうというねらいもある。本年度は、文学の教官も

いった言葉で表現する企画も行った。以下に今年の主な企画を列記する。

- 1) 光学顕微鏡を使って、池や田んぼにいる動物・植物プランクトンを観察する。
 - 2) 実体顕微鏡を使って、自分たちが採取した昆虫や植物を観察する。
 - 3) ゼリーや野菜、果物、水道水などを使って電池をつくる。
 - 4) 試験管の中でケミカルガーデンをつくる。
 - 5) 文字や絵を発光を利用して見る。
 - 6) ミジンコになって、その気持ちを俳句にする。
- などである。



参加し、本公開講座で実際に観察したプランクトンを題材に、それらに触れた喜びを俳句と

なお、この自然科学公開講座は、子供たちにとって夏休みの自由研究になるようにもプランニングしており、さらにこの講座が終わっても、子供たちが継続して自然観察が行えるように、携帯用の小型実体顕微鏡(公開講座時に使用したもの)を各自に渡している。本年度は、この公開講座を受けた子供たちの何人かが、それぞれの小学校の代表に選ばれ、市川市主催の科学展でその成果を発表したそうである。我々のもくろみを超えて、頼もしい限りである。

News

亀井自民党政調会長ら一行が本学を視察

冬の到来も間近な11月29日、亀井静香自民党政調会長ら一行が本学を視察した。

これは、国立大学協会から提出された「国立大学等における教育・研究現場からの緊急課題・21世紀の発展をめざして」と題する国立大学等の老朽化、狭隘化した施設の改善についての要望を国立大学協会、第6常置委員長（財政）の本学鈴木学長が直接陳情したのを受けて、本学と東京大学に対して行われたものである。

視察したのは亀井静香自民党政調会長のほか北側一雄公明党政調会長、井上喜一保守党政調会長、自民党の尾身幸次幹事長代理、河村建夫政調副会長、大蔵省の林主計局長、原主計官、文部省の鈴木総括政務次官、小野事務次官、近藤官房長、徳永会計課長、小田島文教施設部参事官らである。

一行は、学長室で鈴木学長から大学の实情について説明を受けた後、鈴木学長、佐藤医学部長、江藤歯学部長、渡橋事務局長らの案内で歯学部校舎棟、歯学部附属病院、医学部附属病院、医学部中央診療研究棟を精力的に視察した。一行は極度に老朽化・狭隘化した研究室にも拘わらず、そこで行われている高度の研究も熱心に見学した。

特に、人工心臓実験室やシステム神経機能研究室では実験装置を使った担当教授の説明に耳を傾け、人工心臓や脳細胞の様子を興味深く見入っていた。約40分の視察を終えた後、報道陣に取り囲まれた亀井会長からは「劣悪な環境で研究をやっておられることが良くわかった。科学技術教育予算に反映させたい。」というコメントがあった。



鈴木学長から実情を説明



実験室で興味深く視察する一行

教養部 雑考



教養部 英語

助教授 吉 田 朋 正



医歯大1年目の「新入生」ですので、教養部について自分なりの考えなどを述べてお茶を濁したいと思います。

その昔アメリカに、バックミンスター・フラウという「変な人」がいました。64の名誉博士号を持つ「現代のレオナルド」で、建築、工学、哲学、文学、その他あらゆる領域でユニークな仕事を残しました。平面上に歪みのない世界地図を描いて見せたり、アル・カポネの時代にデファレンシャル・ギアを装備した卵形自動車を作ったり、アインシュタインの理論を4歳の娘に説明するために「簡潔な理論書」を書いたりしました。この本がきっかけとなって、フラウは物理学者の知遇を得ることになります。

医師が小説を書いたり、数学者が曲芸を見せたり、多芸な人は結構いるものですが、たまに仰々しく「天才」と呼ばれたりするのは、すべての仕事に一貫したモチーフを持つ人物だけだと思います。彼は、まさにそういう人物でした。

ここで本当に面白いのは、フラウの尋常ならざる「多才ぶり」などではなく、彼が常に、古くからある単純なテーマ「全体は部分からは予測できない」を表現するために、ものを書いたり造ったりしていた、ということです。

大げさな前置きですが、僕はこのテーマが、大学の「教養」の意味を簡潔に言い当てていると思います。例えば、単純な部分を累積しても、単純な全体になるわけではない。このことは、ネットワークのような具体的メタファーを持つ僕らにはよく分かります。個々のネットワークがツリー状で、その起点と結果を的確に言い当てられるとしても、ツリーからツリーが展開する「インターネット」はもはやそうではない。

でも、システムの累積がカオスめいたものになり得るとするのは、本当はとても古い知識です。例えば身体について、昔の西欧人は同じことを考えていました。つまり単なる整合性としてではなく、ケアティックなものを背後に予感させるような場所として、身体はコズミックなもの（マイクロコズム）と呼ばれたのです。

医歯大らしく身体の比喩に少しこだわりますと、フラウが述べているのは、例えば医学的に微視的な知識をどれほど累積しても、「身体」には届かない、ということでしょう。全体というのは、直接知り得ないもの、あるいは「何かまったく別の方法で理解すべきもの」だ、ということです。「3と6の公約数」を外延的に定義（列挙）できても、「すべての偶数」について同じやり方をするわけにはいかない、といったことです。

こういう限界は、むろん専門的な研究者が早晚突き当たる問題ですけれど、「限界」の意味を考えるためのツールは、当の細分化された専門知識ではありえない。そう僕は信じています。それが「教養」という名で呼ばれている、もうひとつの知の形じゃないでしょうか。教養（部）で得るべきものとは、ある種のデタッチメントなのです。つまり、ものを遠くから眺めたり、自分自身を端から冷静に眺めるような、良い意味で「ずれた」観点の獲得です。まあ、こんなのはいかにも教養的なアルス・レトリカに過ぎないと言われれば、それまでなんですけれど...

でも、とりわけものを表現する力は大切だと思っています。外国語以上に日本語が大事ですし、表現するには、やっぱりものを知らないこと

悲しいほどに説得力がない。これは自戒もあるわけですが、学生のみなさんも常にラディカル

な探究者であってください。

人間科学 夏の体験学習を終えて

教養部 人間科学教育担当
助教授 中村千賀子



今年も、8月11日には、医学科2年生(男子57名,女子22名),歯学科2年生(男子31名,女子28名)と保健衛生学科1年生(看護学専攻女子10名),あわせて149名(57グループ)が無事に夏の学外体験学習を終えることができた。今年の協力施設・機関は、両学部の附属病院を含めて、表に示すように32か所であった。ここにあらためて、学外・内の関係施設・機関・部門の方々に感謝申しあげたい。

施設・機関によっては、体験学習に先立って事前オリエンテーションが用意され、学生は緊張しながらも、期待と不安を胸に、初めての施設・機関を訪問した。なかには、自分の都合でオリエンテーションの日時の変更をお願いしながらも、大幅な遅刻をして、その上お詫びを適切にすることができず、学生・教官共々、担当者のおしかりを頂戴するなど、波瀾に富んだ幕開けもあった。

そうした苦しい事件もあったが、多くの学生は、体験学習先の担当者、職員の方々に支えられ、様々な人々に出会い、緊張し、落ち込み、時にはトイレで隠れて泣いたり、心が右に左に大きく動きながらも感激を味わう貴重な体験を重ねた。個人差はあるものの、こうした大きな感情の波にもまれながらも、真剣に、そして素直に人に向かい、人間の幅広い生き方やそれぞれの個人が持つ思いに実際にふれることができ

たことは、終了直後に提出されたレポートからもあきらかであった。賢い患者になることをモットーとする「コムル東京」では、朝日新聞社の取材を受け、8月24日の「暮らし」欄に学習中の学生の写真とともに、本学の人間科学教育課程が紹介されるというすばらしいおまけもあった。

健康教育・予防医療、治療現場、リハビリテーション関連施設、在宅ケア、高齢者、心身障害者、青少年・児童施設、また、ホームレスの人々への宿所提供施設などバラエティーに富んだ特長を備えた施設・機関で、「人間が生きるとは」「目の前のその人を理解するとは」「自分とは誰か」などの課題を考える機会を真摯に求め人間に関わろうとした学生には確かに貴重な時間と場所が与えられた。その点からも、今年の体験学習は、昨年と同様、成功したといつてよい。

しかし、こうした感激いっぱい、一方ですぐれて個人的な、たった1回きりの体験は、夏も過ぎ、2学期のクラスを迎える頃には、早くも風化しはじめていた。このことは、先の遅刻騒ぎで失敗した学生の、2学期のクラスで仲間から参加施設名を問われて答えた「どこ、いったんだっけ?」との発言に象徴的に表れているように思う。

体験学習を終えての2学期のプログラムは、

シリーズ人間科学教育



あかね苑にて

参加グループ別に各人の体験を話し合うクラスから始まり、その後、各施設に参加した学生が混ざりあったグループで「自分にとっての体験の意味」を各人の視点から語り、深め合うクラスが4週にわたり続く。その後は、各グループがそれぞれの「体験学習から得られたもの」を希望のサブ・テーマでまとめる傍ら、個人の課題をさらに深く掘り下げる教官との面談を行う。

昨年までのこの時期は、自分たちの面談時間以外、テーマ別グループで任意の場所に集まり、まとめ作成の話し合いをしていた。今年度は、科学学習部門の、医療・臨床心理学の基礎 b、哲学・生命倫理の基礎 c、あるいは、選択科目として今年度はじめて導入された法学・医事法学の基礎 d から学んだことをガイドとして、基礎 a において得た自らの体験をより深く吟味

し、経験化するためのプログラムを10月から5週にわたって試行する機会に恵まれた。具体的には、1998・99年度の『人間科学教育課程年報』に研究論文を寄稿された、教育学の専門家であり、高校での教師歴も持つ太田健児講師を迎えての、チュートリアル教育である。

学生は一つの教室に集まり、グループでそれぞれのテーマごとに体験を素材として話し合い、まとめを作っていく。そばで、太田講師がその活動を見守り、必要なきに助言をしていく。贅沢な

チュートリアル教育である。教育学も細分化が懸念されている医学・医療と同様に、細分化が進み、目の前にいる生徒や学生に目が向かなくなり、ついには、「教育人間学」、あるいは「教育臨床学」が提唱されはじめたという。こうした変化の起きつつある教育学領域の専門家によるチュートリアルは、学生に好意的に受け止められた。この原稿の締め切り日の現在はまだ、新しく導入されたチュートリアルによって作られたまとめは提出されていない。

実際に、まとめがどのような形で提出されるかによって、チュートリアル教育の効果が、言い換えれば、学生が体験学習部門と科学学習部門からなる人間科学教育を消化し経験化することができるか、今後ははっきりすることを期待して報告としたい。

< 協力施設・機関 >

アカデミーアンドアセスメントエイド、コムル東京、ライフプランニングセンタークリニック、榎本クリニック、三楽病院、本学医学部附属病院、本学歯学部附属病院、荏原病院、クボタクリニック、在宅ケア協会、あかね苑、合掌苑、新生会、中落合高齢者サービスセンター、特別養護老人ホーム中目黒、福音会、福栄会、隆徳会、東京板橋福祉工場、かみよん工房、かもめ工房、湘南鬼瓦、東京障害者職業センター、多摩療育園、心身障害者福祉センター、府中療育センター、やどかりの里、横浜訓盲院、東京家庭学校、青少年健康センター、バット博士記念ホーム、塩崎荘

清潔志向の行きすぎが アレルギー反応を誘発する

社会文化功労賞及び国際文化栄誉賞を受賞して



大学院医歯学総合研究科 国際環境寄生虫病学分野
教授 藤田 紘一郎

私はこのたび文化庁関係団体の日本文化振興会より、平成12年度社会文化功労賞及び国際文化栄誉賞を受けました。

私は過去35年間にわたり寄生虫とヒトとの免疫応答の研究を続けてきました。そして寄生虫感染はヒトのアレルギー反応を抑えることを発見し、その機序および寄生虫体内物質(γ DiAg)を明らかにしました。この γ DiAgは分子量約2万の糖蛋白質で、非特異的なIgE抗体を大量に産生します。この物質はB細胞上のCD40分子のアゴニストであり、B細胞をポリクロナールに活性化し、 γ DiAgに特異的なヘルパーT(CD4)細胞をアポトーシスさせ、その結果、ヒトのアレルギー反応を抑制させるという機序を明らかにしました。この多量の非特異的なIgE抗体は肥満細胞上のIgEレセプターをすっぽり被って、アレルギー反応を抑制していたのでした(図1)。

アレルギー反応を抑制しているのは、寄生虫ばかりでなく、ウイルスや細菌などの微生物もヒトのアレルギー反応を抑制していることがわかりました。わが国において、アトピーや喘息が増加し続けているのは、身の回りの寄生虫を追い出し、私たちを守ってくれている細菌たちを追い出している「超清潔志向」が関係していると私は数年前から主張して参りました。

しかし、私の研究や主張は日本のアレルギー学会ではなかなか認知されませんでした。ところが、アメリカやイギリスでは私の成果が次々と紹介され話題になりました。たとえば、Newsweek 1998, The Boston Globe 1999, Suddeutsche Zeitung 2000, New York Times 2000, The TIMES 2000といった具合です。今回の社会文化功労賞、国際文化栄誉賞はこれら海外での評価によるものでしょう。

私は35年前、インドネシアのカリマンタン島

を訪ずれ、住民の健康診断を行ないました。彼らはうんちの流れている川で遊び、全員回虫にかかっていましたが、肌がつやつやしてアトピーや喘息のない子どもたちでした(内表紙)。私の研究は、この住民健診からスタートしたのでした。

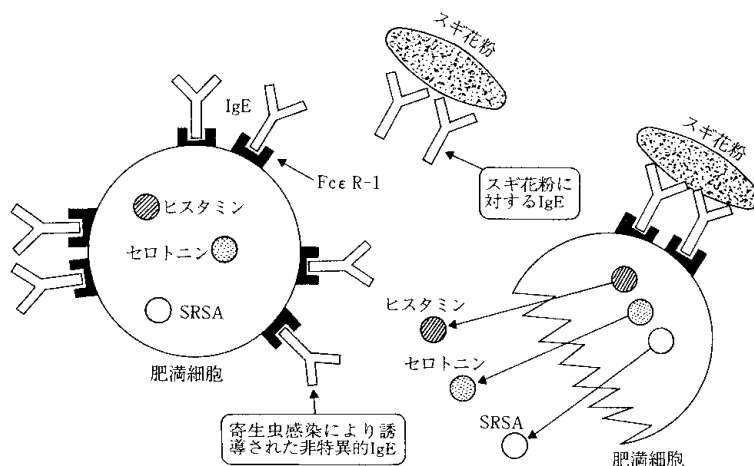


図1：寄生虫感染時に産生された非活性のIgEが肥満細胞の脱顆粒をブロックする

「朝日歌壇賞」を受賞して

教養部 文学
助教授 日置 俊次



本年始め、第16回「朝日歌壇賞」をいただきました。これは1999年の1年間にわたって「朝日新聞」の「歌壇」欄に掲載された短歌の中から、各選者が最も心に残った歌を1首ずつ選ぶもので、私の作品は馬場あき子先生の選によるものです。

日本における俳句・短歌という「定型詩」にたずさわる人口の多さは、世界的に考えても奇跡に近いものがあります。こうした貴重な伝統文化が、われわれの日常にしっかり根を下ろしていることを毎週確認できる場が、地方紙全国紙を問わず新聞には必ずもうけられている「俳壇・歌壇」と呼ばれる定型詩欄です。

そのなかでも「朝日歌壇」は、いままで多くの著名歌人を生み出して来ました。最近でも、渡辺松男さんや中川佐和子さん、大口玲子さんなどは、ついこの間まで「朝日歌壇」に投稿していた印象があるのですが、すでに本格歌人としてめざましい活躍をしています。

このような伝統ある「朝日歌壇」において、毎月数万ともいわれる短歌が投稿されている中から年間の第1席として、尊敬する馬場あき子先生の選に入ったということは、大変な名誉と考えております。

また、文学を専門に研究する立場から申し上げますと、わたしたちは資料や論理の操作のうちこむうちに、ついつい実作者の感覚から無限にずれて理屈だけの世界に閉じこもってしまいがちなのですが、短歌はそんな弊害からすこしは私を救ってくれているようにも思います。

さて、今回受賞した作品は、次のとおりです。

ハムスター死して遣せし向日葵^{ひまわり}の種ひとつ
ずつ植えゆく児らは

今年1月23日付「朝日新聞」朝刊に掲載された、私の「受賞の言葉」も以下に転載させていただきます。

ハムスターの新しい家（2階建）を子供たちと選んできて、大騒ぎしながら「家具」の配置を決めていたところに、受賞の知らせが届きました。

ハムスターなら今ポケットにいますがと電話で話すと、死んだのではないのですかと聞かれました。これは2代目です。

子供たちが向日葵の種を植えたのは6月のことで、花が咲かなかったのも哀れでした。私はそうした現実を言葉にただけで、何もしておりません。賞をいただいたのは私ではなく、子供たちの心です。どうもありがとうございました。

この受賞を機に、馬場あき子先生のご指導をいただけるようになりました。したがって、この受賞が私の人生の大きな転機となっていることは疑えません。

記念品としていただいた時計は、いつも書斎の机の上に置いてあります。

米国における抗癌剤研究を垣間見て

大学院医歯学総合研究科 消化機能再建学分野

助手 市川 度

教室では、抗癌剤代謝関連酵素および標的酵素の発現からみた治療効果の予測に取り組み、これを利用したオーダーメイド医療の実現を模索してきました。この度、「新規産業創出のための在外研究員」として、訪米する機会をいただきましたのでご報告させていただきます。

最初の研究先は、南カリフォルニア大学ノリス癌センターの Peter Danenberg 教授の研究室でした。この研究室は消化器癌化学療法における thymidylate synthase からみた治療効果予測の分野で世界的な業績をあげており、訪問時はパラフィン包埋切片から RNA を抽出し real-time PCR 法により抗癌剤の薬効に關与する種々の予測因子を検討していました。全米はもとより世界中の臨床試験に参加した患者のパラフィン包埋標本が次から次へと送られてくる



Danenberg 教授の研究室にて

(中：Danenberg 教授，右：Danenberg 教授夫人，左：筆者)

様は圧感でした。これらの質の高い大きな臨床試験から得られた多数の臨床検体を用いて、抗癌剤効果予測因子を evidence として明らかにすることが、この研究室の大きなテーマです。消化器癌の抗癌剤としてはフッ化ピリミジン系

抗癌剤が従来は key drug でしたが、現在では irinotecan や oxaliplatin へ移行しつつあります。これらの二薬剤はともに本邦で開発された薬剤ですが、臨床試験のみならずその効果予測因子まで海外で検索されるところに、抗癌剤後進国日本の姿を感じました。訪問中に行った研究は、消化器癌原発巣と転移巣における抗癌剤代謝関連酵素および標的酵素の発現の差を検討することでしたが、すでに当教室より留学中の植竹宏之先生（平成1年卒）の協力により、1ヶ月という短期間で終わらせることができました。

次に、米国における抗癌剤臨床試験の現状を見聞する目的で MD アンダーソン癌センターに移動しました。訪問した部門は、Jaffer Ajani 教授、Richard Pazdur 教授らの腫瘍内科部門でした。現在、化学療法の分野では無作為比較臨床試験の結果に基づく evidenced based medicine (EBM) が金科玉条のように叫ばれていますが、その一方でゲノム発現に基づくオーダーメイド医療の試みも模索されています。集団を対象とする無作為比較臨床試験と個を重視するオーダーメイド医療は全く異なる概念のように思われますが、旧知の Pazdur 教授の見解では、EBM の積み重ねによりもたらされるものがオーダーメイド医療とのことでした。米国では、医療費という経済的問題のため無作為比較臨床試験に参加せざるを得ない患者も少なからず存在し、その一方で臨床試験のコントロール・アームとなっている「標準的治療」をプライベート・クリニックで受ける経済的成功者も存在する現実に、国民間に経済格差の大きい米国を感じました。

Danenberg 教授は、すでに産学協同で RE-

SPONSE GENETICS 社 (www.responsegenetics.com) を設立し、抗癌剤効果予測因子の臨床応用を開始しています。オーダーメイド医療は、テーラーメイド医療と称されることもありますが、「テーラーメイド」には洋服を仕立てる際高いお金がかかるというイメージがあります。国民皆保険の本邦で根付かせるには、コストの問題を解決する必要がある、その時初めて

「新規産業創出」が可能になると思われました。

今回の私の体験は多様な米国の抗癌剤研究の限られた一部を垣間見たに過ぎませんが、少しでも本学の発展のために還元できればと思っています。

最後になりましたが、今回の貴重な機会をお与え頂きました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

マサチューセッツ工科大学留学記

生体材料工学研究所 システム研究部門情報分野
助教授 福 岡 豊

1999年8月より10ヶ月間、文部省在外研究員として Harvard-Massachusetts Institute of Technology Division of Health Sciences and Technology (略して HST) の Dr. Richard J. Cohen の研究室で勉強する機会を得ました。HST はハーバード大学医学部とマサチューセッツ工科大学 (MIT) による教育・研究機関であり、工学、生物学、医学の基礎研究と臨床の橋渡しをすることを目的としています。

(詳細は <http://hst.mit.edu> を参照。)

アメリカというお国柄が、HST には cardiology に関係する研究室が多数あります。筆者の滞在した Cohen 研究室 (MIT に所属) も長年にわたり心拍変動の解析を中心に心循環系のモデリングに関する研究を行っています。筆者に与えられたテーマはアブレーション治療法のためのカテーテル・ナビゲーション・システムの開発でした。これは始まったばかりのプロジェクトであり、システムの仕様が決まった後は、それをどのように実現するかについては自分で考えなさいとのことでした。最初の数ヶ月は、機能するシステムが作れるか非常に不安でしたが、1999年も暮れる頃になると少しは形になるものが作れそうだと目処がついてきました。

研究が軌道に乗り、アメリカでの生活にも慣れてきた2000年春学期には、研究室の学生の勧めもあり、HST の2つの授業を聴講しました。1つは cardiovascular pathophysiology であ



HST のセミナー後のパーティーで (後列中央が Cohen 先生、左端が筆者)

り、研究を進めるうえでバックグラウンドとなる知識を得ることができました。もう1つは medical computing というコースで、medical informatics と bioinformatics がテーマでした。どちらの授業も（おそらく HST の全ての授業が）ハーバード大医学部の学生と MIT の大学院生の混合クラスであったのが印象的でした。筆者の研究領域である生体工学（biomedical engineering）は日本でもしばしば学際領域であると言われますが、教育は工学部の既存の学科の中で行われるのが普通です。これには大学だけでなく社会全体のシステムが深く関係しているため問題は単純ではないのですが、日米の差を認識させられる一幕でした。

アメリカ生活で強く感じたのは、アメリカ社会はさまざまな面において多様性があるということでした。これは長所にも短所にもなり得ることでしょうが、多様性が新しい技術・新しいビジネスを生み出す土壌となり、現在のアメリ



MIT の Charles Vest 学長（中央）と

カの発展に寄与するところが大きいと感じました。振り返ってみると長いようで短かった10ヶ月でしたが、多くの有益な経験をし、多数の友人を作ることができた有意義なボストン留学でした。最後に、情報分野の諸先生方には、出張中に事務処理・連絡などで大変お世話になりました。また、ボストンでは多くの方々に助けていただきました。これらの皆様に感謝しつつ、稿を終えたいと思います。

My experiences of Japan

歯学研究科（小児歯科学）

大学院4年 Jayanetti Asiri Jayawardena



I graduated from the University of Peradeniya Sri Lanka in 1990. Thereafter, I was working in the same university as a staff member until I came to Japan on a Monbusho scholarship in April 1996. The events that took place during the first few days of my arrival at the Narita airport, still remains in my vivid memories, as if they had happened yesterday. The relevant officials greeted us warmly and we were accompanied to the beautiful dormitory of Chiba University. The

splendid atmosphere of early spring with blooming Sakura flowers and fresh green of sprouting leaves, which I could see on the way to the Chiba City, was breath taking and exciting.

My first exposure to Japanese culture and traditions was when I studied Japanese language at Chiba University. Needless to say that studying a foreign language is a big challenge and the Japanese language was no exception. However, our language program

外国人留学生だより

had the variety, including some out-door programs which I think not only minimized the boredom of studying the language at a stretch, but also gave the opportunity to learn the Japanese culture directly. During this period I got the chance to visit historical cities such as Kyoto and Nara. Magnificent structure of Kinkakuji and Kiyomizudera and their serene surroundings were very impressive. In addition, I also got the chance to make friends among my classmates of other nationalities.

Then, after completing 6 months of Japanese language, I proceeded to Tokyo-ikashika.

Being a novice to the academic life in Japan, I had a lot of expectations of achieving my goal of obtaining the degree of Doctor of Philosophy. Besides, having come from a country where resources for research are limited, this was a fantastic opportunity for me to carry out research. When I look in retrospect to the past 4 years, I am happy that I was able to acquire vast knowledge about my research field. Not only I could learn the methodology, but also endurance, patience and all other difficulties which are part and parcel of any researcher. In this regard, I am grateful to all the friendly and supportive members of the department of pedodontics including professor Takagi and Dr Kato who helped me in numerous ways both in academic and day to day affairs.



With the fellow departmental staff, after acting in a drama in an annual trip

One of the most fascinating things I experienced in Japan is the seasonal change and the natural beauty associated with it. Wonderful views of Sakura flowers of early spring, and the Hanami under Sakura trees are all going to stay in my memories forever. Although summer is hot, it was not unusual for me, and reminded me of the same kind of weather experienced in some parts of my country. This, not so kind weather is fully compensated by wonderful summer events, the most attracting being the Hanabi festival. The colorful autumn leaves and the snow, which I saw for the first time, was all breath taking. First, I was amazed to find the enormous variety of Japanese cuisine, which later, turned out to be one of my favorites. During my stay, I also enjoyed some precious human qualities in Japanese people, such as commitment and dedication for a purpose, extreme politeness, punctuality, and teamwork etc.

I can't help mentioning about our new dental faculty in Peradeniya, which was built with generous support from the Japanese government. I am sure, this project has already laid a strong foundation for a new era of collaboration between the respective dental professionals. When I visited it for the first time, I couldn't, believe my eyes at the sight of the beautiful new dental faculty in Peradeniya. It was equipped with modern facilities and was quite different from the one I used to study and work before. In addition, many Japanese dental specialists, many of whom were from TMDU, were busy with treating patients, teaching students' etc. In this connection, I would like to express my heartfelt thanks to the Dean, Professor Eto and Professor Tagami who were instrumental in initiating a development project for our University.

I'm ever grateful to Japan for giving me this valuable opportunity that enabled me to receive so much, both from her advanced education and enriched culture.

東京医科歯科大学 お茶の水祭'00

10月21日・22日

20世紀最後のお祭 閉幕!!

お茶の水祭実行委員長
ひら い たか し
平 井 高 志 (M4)



10月21, 22日に行われたお茶の水祭でしたが、幸い雨にも降られず、大きなトラブルもなく大盛況のうちに閉幕しました。今年のテーマである、「Fusion! ~ 医か歯た奴ら ~」にふさわしい学園祭にしようと、委員一丸となってこのお祭りに準備を重ねました。学長、学部長をはじめとする先生方にもこのキャッチフレーズはタイムリーだったようで、我々学生の、大学という枠を超えて他大学学園祭との情報交換や企画の共同化といったできる限りのインカレ化と、我が大学の独立行政法人化問題に伴う他大学の提携というトピックにうまく絡めることができたと自負しています。

さて、まず我々委員会が運営した企画の報告をしたいと思います。医療系大学に期待される企画を出せるだけ出そうと、はじめたのが大医学展でした。これには、寄生虫展、解剖展、学生講義、講演会、公開模擬授業の16のパートから分かれるものでした。寄生虫展は医動物学、病理学教室に多大なる協力を得て、多くの標本と藤田教授のペット(?)を展示し来場者を驚かせていました。M3の有志により開かれた解剖展でも、人体の精密さに多くの来場者が集い、大成功に終わりました。敷地も人数も限られた我が大学の中でこれだけのことができたのかと驚きました。

また、営利団体ではステージ企画の充実から、おそらくどの店舗も繁盛したのではないのでしょうか。昼間の来客者は1日目で、かつて無いくらいの入りで委員一同喜んでおりました。

学生部だより

目 次

お茶の水祭 '00	18
20世紀最後のお祭 閉幕!!	18
お茶の水祭本部企画	19
お茶の水祭表彰団体	22
解剖体慰霊式追悼の辞	26
医学科合宿研修	27
「2000年外国人学生のための進学説明会」 に参加して	29
2000年度(後期)日本語教室開講	30
「日本語研修コース」開講式 留学生センター	31
平成13年度前期授業料免除申請受付	32
平成12年度日本育英会奨学生推薦状況一覧	33
平成13年度入学者選抜	34
募集要項の配布	34
テレホンサービス	34
平成13年度4月期国際交流会館の入居募集	34
平成12年度定期健康診断結果	35
宿泊施設案内	38
学生サークル組織状況	39
サークル紹介	40



学生部だより

その他の企画で目立ったものは、歯科技工士の展示でした。毎年、技工物の展示は完成度が高く、展示品の精巧さに来場者は見入っていました。

また、後夜祭は一味変えようと、カリスマプロデューサーのD4宮坂氏によりデザインされ、各参加団体、開放感と充実感で大きな盛り上がりを見せ閉幕しました。

大学の最も大きなイベントである、お茶祭をやり遂げた委員一同、この成功の喜びを分かち合い、今後も特別な思い出になることと思います。

また、お茶祭成功まで我々を親切に導いていただいた、学長を始めとして、多くの教職員の



後夜祭

方々に対し委員一同感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

お茶の水祭 - 本部企画 -

公開模擬授業

担当：満生紀子 (M4)

稲垣 桂 (M4)

10月21日、22日の二日間に渡り、3人の先生方に講義をお願い致しました。内容は下記の通りです。

「みんなの法医学」

国際健康開発学講座司法医学分野

伊藤 洋子 教授

「口腔癌と口腔の機能」

顎顔面機能修復学講座顎顔面外科学

天笠 光雄 教授

「ヒトと寄生虫のいい関係

- 花粉症からダイエットまで -

国際健康開発学講座国際環境寄生虫病学分野

藤田紘一郎 教授



伊藤洋子教授のお話には、「医学部に行く意思が固まり、将来は法医学に携わる人間に絶対になりたい。」といった受験生の感想や、天笠光雄教授のお話には、「口腔という身近な部分にも色々な病気が起こりうると知り驚きました。」「口腔癌を自分で発見できる方法がもっと広まったらいいと思います。」といった感想も寄せられました。また、藤田紘一郎教授のお話

には、「日本人の清潔志向を改めて考え直しました。」「寄生虫との共生の意義を地球規模の視点から考えられました。」といった感想が寄せられました。

多くの方々をご聴講され、医学歯学に興味のある方だけでなく、高校生や一般の方々にも大変喜ばれ、成功のうちに終えることができました。これも先生ならびに、大学関係の皆様のご協力によるものと感謝しております。来年の公開模擬授業にも、多くの方々をご聴講されますことを期待しております。

講演会報告

担当：瀬戸口雅彦（M4）

今年度のお茶の水祭講演会は「医学教育」というテーマで、スタンフォード大学の赤津晴子先生と東海大学医学部長の黒川清先生をお招きして、10月22日の午後1時から5号館講堂で行われました。

赤津先生はベストセラーになった「アメリカの医学教育」の著者で、アメリカで正規の医学教育を受けられた方です。先生は、「今、名医であっても10年後は名医であるとは限らないので、問題解決型の学習方法を行い、知識をつねに version up できるように教育する」というアメリカの医学教育についてお話をくださり、さらに good doctor であるための必要条件として‘compassionate doctor’と‘EBMに基づく Competent doctor’ということを挙げられ、それぞれについて分かりやすく説明してくださいました。

黒川先生は、日本の大学教育の歴史からお話を始められ、ITの普及によって医学教育は今後どのように向かっていくかということと、そして様々なレベルで「混ざる」ことや学生が自ら動くことの重要性をお話してくださいました。

当日は両先生の講演の終了後、他大学の医学

生に赤津先生、黒川先生を交えたパネルディスカッションを行いました。参加してくれた学生パネリストである、本学医学部の新井薫さん、日本医科大学の坂野真理さん、東海大学医学部の市村公一さん、東京女子医大の西田純子さんらが、自分の所属する大学の医学教育について学生の視点での問題点や提案を行い、それらについて議論を行いました。また、このパネルディスカッションはパネリストのみならず講演会の来場者にも参加できるようにしておいたのですが、私の予想をはるかに上回る大変活発な議論が行われました。

当初は3時間を予定していたこの講演会ですが、終了は予定時刻を40分もオーバーするという結果になりました。それでもアンケートには、「時間が全然足りない」という意見がたくさん寄せられ、参加者の熱心さにこちらとしても圧倒される思いでした。アンケート結果では、参加者の大多数の方々も満足して下さったよう



ですし、黒川先生、赤津先生も「とても楽しかった」とおっしゃってくださいましたので企画者としては嬉しい限りです。この講演会に参加して下さった方々、先生方、企画を手伝って下さった関係者の皆さん、御協力本当に有難うございました。

中夜祭報告

担当：山内慎一（M4）
やまうちしんいち

芳村雅隆（M4）
よしむらまさたか

10月21日（土）に行われた中夜祭は無事に大成功に終らせることができました。中夜祭に携わってくれた方々に深く御礼申し上げます。

今年はコージー富田をステージに呼びました。コージー富田はタモリや島田紳助、松山千春など多彩なものまねレパトリーをもち、最近テレビや各大学の学園祭で人気急上昇のタレントです。タレント選定にあたっては、4月に学生にアンケートを行い、その人気のタレントの中から、コージー富田を二人の独断と偏見で決め

させていただきました。

当日は300名以上の観客がステージを見に訪れました。コージー富田は、タモリ、鈴木雅之、石橋貴明...と次々とネタを披露し、その上手さに会場は爆笑に包まれました。観客の反応が良かったせいか、コージーも自分のレパトリーをほとんど披露してくれ、大変に盛り上がりました。

お茶祭の企画の中でも、集客力などの面で重要な中夜祭企画でしたが、無事に終わり、本当に良かったと思います。最後に直前に無理を言って仕事をしてもらった1年生と、様々にご迷惑をかけた学生課の方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



コージー富田



クイズ大会



看板娘

第49回 お茶の水祭 表彰団体

「湯島寄生虫館」責任者より

学 長 賞

“2号館の臨床講義室にぼつんとたった一人、数十種類もの寄生虫に囲まれ、こんなに頑張って準備したのにお客さんは誰一人来てくれない。”私はこんな悪夢にお茶祭の一、二週間前から悩まされつづけました。しかしそんな心配をよそに、両日あわせて1500人を超えるお客さんが寄生虫たちを見に来て下さり、私もやっと悪夢から開放されることができました。寄生虫展と一緒に企画した、本部企画の責任者である柴田君に「寄生虫展よろしくね」と頼まれてから、医動物の試験に落ちた自分で大丈夫なのかなど不安でした。それからというもの、藤田先生の本を何冊も読み、目黒寄生虫館に視察に行ったりとお茶祭に近づくにつれ「木本寄生虫館」と馬鹿にされるようにまでなりました。

展示企画というのは勉強することがたくさんあり、非常に多くの友達や、先生方の協力も必要で大変ではありますが、当日一般の方々が私たちの展示物に興味を示している姿を見ると、医療系の大学である以上このような企画は不可欠だと思いました。医学部という、外から見れば非常に不透明で閉ざされた社会を開放するような感触を私は寄生虫展を通じて感じました。寄生虫に関するだけでなく、私たちが医学生であるというだけで色々な事を質問され、皆さんが医療にどれだけ関心を持ち、また疑問を抱いているのか実感しました。これからのお茶祭でも医療系の総合大学という特色を生かし、展示企画を更に発展させていって欲しいと思います。



最後になりましたが、貴重な標本を貸して下さった先生方、あらゆることを手伝ってくれた学生のみなさんにお礼を申し上げたいと思います。またお茶祭の直前、やるが多すぎてイライラしていた私に、八つ当たりされたり、キツイことを言われた方、この場をお借りしてお詫び申し上げたいと思います。後夜祭で「湯島寄生虫館」が学長賞を受賞し、あまりの驚きと嬉しさでポロポロ涙を流していた私と一緒にもらい泣きしてくれた人、どうもありがとう。「お茶祭で忙しいから」とか言って家のことを何もやらない私を支えてくれたママ、どうもありがとう。

本部企画担当 きもと なお 木本奈央 (M4)

この企画は夏前から少しずつ準備を進めてきたのですが、それが実を結び学長賞を受賞できたことをうれしく思います。責任者の一人でありながら仕事のほとんどをもう一人の責任者(木本)に任せっきりで僕のした仕事は微々たるものですが、それでもこの企画に参加できたことは大学時代の忘れられない思い出となることでしょう。

本部企画担当 しばた こう 柴田 幸 (M4)

湯島寄生虫館を手伝ってくれた人から

“どのくらい、そしてどんな人達が来るのか？”

学生部だより



湯島寄生虫館

これは当日まで私が疑問に思っていたことです。フタをあけてみれば、医歯大の学園祭こんなに人が出入りしている!!と感激してしまうほど、多くの人達が湯島寄生虫館にいらしてくださいました。来場者は老若男女入り混じっており、皆興味津々で寄生虫に見入っていたのが印象的でした。学園祭前日、寄生虫はゴロゴロいても人は準備するためにぼつぼつとしかいないうらわびしい寄生虫館を知っただけに、当日多くの人を訪れそしてそれぞれ楽しんでいる(高校生達の反応は妙におもしろかった)のを見ることができて本当に良かったです。

この企画が成功に終わったのは実行委員の木本さんや柴田君のがんばりがあったからこそだと(関係者だから褒めているというわけではなく)今ごろになってしみじみ思います。お疲れ様でした!

渉外担当 わかばやし まい 若林 麻衣 (M4)

できるだけ専門用語を避けるようにした甲斐があり「説明が分かりやすかった。」という感想が多く見受けられました。たくさんの方に興味を持って頂けたことを実感しました。

もり ちさと 森 千里 (D4)

演 劇 部

医歯学祭賞

この度は、このような賞を頂いて有難うございます。靱帯を切って全治一ヶ月の重症を無駄にみまってお茶祭委員長 H 君に献上したいところではありますが、有難く貰っておこうと思います。

思えば大変でした。今年から開催場所であった一号館特別講堂が微妙に改装され、無駄に徹夜、その後もなかなか帰れずに皆、汚い身体で過ごし、頭も微妙にかゆくなって大変でした。一年生が無駄な頑張りを見せ、ことに N 君に関して言えば、手首を骨折し、ギブスを装着しながら奮闘した次第であります。しかし、彼は演劇補習のため負傷を負ったわけではなく、私を好きなだけ殴った結果、逆に負傷してしまったという話であります。主役であったこの N 君には、きっと多大な拍手が送られていたに違いありません。また、10日以上もの間、無駄に寝泊まりしていた女の子も存在していました。

その他にも様々な無駄を發揮しましたが、人生無駄なことが大切であり楽しいものです。今回の公演に無駄足を運んだという人も感動したという人にも、多大なる感謝をしています。

春先には、バレンタイン付近に一年生が新人公演を計画している模様であり、定期公演である春、秋(お茶祭)公演も予定通り事が運ぶと思われます。是非いらしてみてください。これからも演劇部を宜しくお願い致します。

演劇部一同

技 工 士 学 校

非営利団体賞

我々、本 I 一同は、この全部床義歯の製作にあたって、クラスが一つにまとまったと思います。クラスが一丸となってがんばった結果このような賞をいただき、本当にうれし

かったです。また、おそくまでいろいろと指導していただいた実習科二年生に心から感謝しています。

技工士学校 やまたにゆういち 山谷雄一

行けなかったのは残念だったけど、今となつてはそのいそがしかったのがなつかしいです。

学校生活で本当にいい思い出になった文化祭でした。

たにむらなみこ 谷村菜見子

まさくんのたこ焼き

営利団体賞

今年はまさ君のたこ焼きも2回目となり、理想的なたこ焼きを作り上げる事ができました。しかも営利団体賞という素晴らしい賞までいただき最高でした。
やまたにゆういち 山谷雄一



今回は去年以上に盛り上がり、好評のうちに終わって良かったな—と思っていたので、賞をとれたことはとても嬉しいです。

たこ焼きも上手に焼けるようになったとしても楽しい文化祭でした。

たかはしな お 高橋奈央

今年で“まさくんのたこ焼き”は店じまい。焼くのに手いっぱい、身なりなんてかまわられなくて、油でべたべたになっちゃったりもしたけど、でもやっぱり楽しかった。こうして無事に終わってしまうと何だか淋しいです。いい思い出ありがとう。

なかざわよし え 中澤由枝

2年ごしの修業のかいもあって今では立派なたこ焼き職人。この技術を生かして、将来立派な大人になりたいと思います。

りゅういち

2年間にわたって「まさくんのたこ焼き」をやっても楽しかったです。

いそがしすぎて他のお店や展示をあまり見に

つかれたけど、「おいしい!」と言ってくれたお客さんが沢山いたので楽しい2日間でした。
たか の 高し

今年は昨年より大盛況となり、何より買ってくれたお客さんに喜んでもらえた事が1番でした。たぶんあのたこ焼きはうちにしか焼くことのできない、そして、どこよりもうまたこ焼きだと思います。

さくらいよしみ 桜井巧美



解剖展

委員長賞

第49回お茶の水祭では、解剖展が委員長賞という栄誉をいただき、スタッフ一同たいへん光栄に思っております。思えば、解剖展の準備は時間との戦いでした。先輩からのアドバイスで夏休みから準備を始めたものの、2学期が始まると実習とレ

学生部だより

ポートに追われ、土日に作業するののままならない状態でした。さらに、お茶祭直前の1週間にも2科目の試験が行われ、2週間前から直前の木曜日まではほとんど作業ができませんでした。しかし、そこから当日までに展示を完成させることができたのは、ひとえにスタッフ、つまり友人たちと、機能解剖学教室の坂本先生のおかげです。木曜日の試験終了後から、試験勉強で疲れているにもかかわらず夜まで作業し、金曜日も朝から大学に来て夜を通して土曜日の朝まで作業を行いました。この二日間の努力は、今回のお茶祭の中で、一番忘れられない思い出です。

お茶祭当日の2日間は、大変な盛況をみせました。2日間で、800部印刷したパンフレットはすべて配り終え、1000人以上の方が解剖展を見にいらっしゃいました。スタッフは休みなし

で熱心に説明を行い、準備の疲れで足元がふらふらになりながらも充実した二日間を送ることができました。

展示した骨の標本・書籍・脳と心臓の標本・解剖体の説明のために、各自教科書やノートで復習を入念に行った成果が、記帳には「説明が丁寧で分かりやすかった」といった感想が多く書かれていて、努力が報われたと喜びにひたった瞬間もありました。

今までお茶祭で大規模な展示を行ったことがなく、不慣れによる不手際でご迷惑をおかけしたこともありましたが、あたたかく応援してくださいました先生方、先輩方に感謝いたします。今回の経験を生かして、我々3年生が主導することになる来年のお茶祭では、さらなる飛躍を遂げたいと思います。

医学科3年 すずき みちたか 鈴木道隆

チャリティーバザー無事終了のお知らせ

すっかり秋も深まり、東京近郊でも紅葉の見られる頃となりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

このたび、10月21、22の両日、当大学内で行われましたチャリティーバザーを大成功のうちに終えることができましたことを、ここに御報告いたします。収益金は31万円余りに昇り、全額、横浜訓盲院に寄付いたしました。訓盲院は、学生が教養部における生命科学の実習で毎年お世話になっている、目の不自由な子供たちの施設です。今回このような形で、子供たちに貢献

できることを喜ばしく思っております。各教室、看護部の方々には、バザー直前まで、ご無理を言って品物を提供していただき、今回の成功は、皆さまの御協力あってのものと委員一同、感謝しております。

本当にありがとうございました。

2000年度お茶の水祭実行委員会

チャリティーバザー担当

あんざい みほ 安西 実穂 (M4)

うえの まきこ 上野 真紀子 (M4)

きし えりこ 貴志 絵梨子 (M4)

築地本願寺において

解剖体慰霊式行われる 平成12年10月25日

追悼の辞

東京医科歯科大学学生代表
久保 浩一郎（医学部4年）



はじめに献体して下さった方々そしてまたかけがえない御遺体を私たちにあずけてくださいました御遺族の皆様方に心より感謝いたします。

解剖実習が進むにつれ私たちは多くのことを学びました。

人として未熟な私たちにそして医師・歯科医師をめざす私たちに人としての歴史を終えた方々は医師・歯科医師になるために決して欠かすことのできない財産をくださいました。

これにより私たち医学を志すものに課せられた責務がどれほど重大なものであるかを身をもって感じることができました。

本当にありがとうございました。

解剖実習とは日常何気なく動かしている体は、どこまでも不思議で巧妙な構造をしているということを学ぶ場であるだけではなく、人としての歴史が終わるということ、生の後の死というものを学ぶ場でもありました。

実習期間中御遺体に向かい合い私たちは

様々な思いを抱きました。

未知への不安、神秘的なまでの人体の構造への畏怖と困惑、医学知識を得ていく充実感とその裏にある反省、このように様々な思いを抱くことで私たちの心はひとまわりもふたまわりも大きく成長したと思います。

死の重さに触れその奥にある生の重さに触れることで、私たちは医師・歯科医師へまた一步近づくことができました。

献体して下さった方々は、私たち学生にとって最良の先生であるとともに、医学の発展への貢献者に他なりません。

献体して下さった方々の御遺志なくしては、病を治すことに必要な知識は得ることはできないでしょう。



学生代表



全員で黙とう

私たちはまだまだ学ぶべきことが多くあり、今すぐに医学の発展に貢献することはできませんが、将来必ず献体して下さった方々の御遺志に報いることができるよう、精一杯努力し、学び続けていくとともに、尊いお志への畏敬の念と感謝の気持ちをいつまでも忘れずに、胸に刻み込んで生きていこうと思います。

最後に故人の御冥福を心より祈り追悼の言葉とさせていただきます。

平成12年度医学科合宿研修を終えて

千葉県厚生年金休暇センター（千葉市にて）

男子代表 医学科5年
わか ばやし けん じ
若 林 健 二

時の流れとは実に早いもので、我々の大学生活も5年目を迎え、遂にBSL(Bed Side Learning: 病棟実習)も始まった。机上から解き放たれて、現場で行う実習は様々な人との出会いがある。楽しい部分もあるが、辛い側面もあるな、と感じている。

このBSLに先立って行われた医学科合宿研修について振り返ってみたい。

「泊り込みで教官達と学生側でグループ座談会を行う」、この話を聞いたときの学生側の反応は、決して良いものではなかった。「何でそんな事やらなきゃいけないの」、「教官側から説教されるだけだろ」、「酒も無しでそんなこと出来るか」、など...

しかし実際に行ってみると、文句を言っていた連中もやる気になっていて、熱心に話し合いに参加していた。グループ座談会、夕食会(五輪サッカーの日本vsアメリカを見ながら)、二次会(酒を交えて)、部屋に戻ってからの三次会(非公式)、と進むにつれて砕けた話も出来る様になり、場は盛り上がっていった。次の日の朝は寝癖がついたまま朝食会場に登場する者が多かった。

グループ座談会では学部の授業カリキュラムについて検討すべき点、BSLについて、大学院は行くべきなのか、臨床と研究は両立できるのか、といった話を中心となっていた。

二次会では酒を飲みながら先生が辿って来た人生について、何故今の科を選んだのか、等について話をしていたようで、時間の経つのが早

かった印象がある。

三次会は各自の部屋に教官を招いたり、逆に教官の部屋に押しかけたりして騒いでいたらしい。私は途中から良く覚えていない。朝目覚めたら、本来とは違う部屋で寝ていた。

我々が教官と出会う場は大学である。そこでは教える者と教わる者という社会的な関係がある。大学での姿しか見ていない我々には、教官は怖い・縁遠い存在であると映る。だが、大学の外に出て話し合ってみると、教官もまた一人の人間であり、人生の先輩である事に気づかされた。今回の合宿を通して、教官側も学生に対して同様の「見直し」が有った事を期待する。我々もテストの出来や授業の出席率だけで自分を判断されたくはない。

今回このような機会を提供して下さった、学生課・学務課の方々に感謝したい。どうも有り難うございました。



懇親会

女子代表 医学科5年
まつ あ ゆう こ
松 尾 祐 子

今回の合宿研修は総合診断実習とBSLの間の大事な土日であり、さらには4年に一度の祭典であるオリンピックとも重なっていました。家でゆっくりテレビでも見たい学生と先生方(?)にとっては最悪の日程であったかもしれませんが、それでも行う価値はあったと思える合宿だったのではないのでしょうか。

開会式の後には、小グループに分かれてのディスカッション。私のグループでは最初、緊張した雰囲気でしたが、司会の学生がうまく振ってくれて、先生方にたくさん話を聞くことができました。大学院大学になることについての考えや留学の話、学生時代の話など大変興味深いものばかりでした。今回の合宿は教授、助教授の他に講師などの方々もたくさんいらっやっていて、今まで接する機会がなかった先生も結構いましたが、それゆえに多くの体験談と自分では考えたことのない話題にもふれることができましたと思います。



グループ座談会

学生側の私達は卒業後のことをあれこれ心配していましたが、先生方が皆「その時、その時でやりたいことを一生懸命やれば自然と道は開けるし、方向を変える事もいつでも間に合う」

とおっしゃっていたのが印象的です。先生方が教授等になられるまでの道のりは全員バラバラで、誰一人として最初からこうなろうと思っていたのではなく、一つ一つの仕事を大切にやっていたらひょんな縁からこうなった、という感じでした。私もいろんな進路を聞くうちに心配するより、とにかくやりたいことを頑張ればいいのかと勇気づけられました。

夕食時は、大スクリーンにうつるオリンピックのサッカー観戦がメイン。サッカーに集中していたために会話は例年に比べて少なかったかもしれませんが、皆で心を合わせて日本を応援するというのもなかなかでした。日本が得点すると拍手がおこり、失敗すると大きなためいきが。

2次会でお酒が入ると、先生方からさらにももしろい話が出てきました。某教授の奥様とのなれ初めや違う教授の愛の理論などまで。先生方のより素顔に近づけたことでBSL前の緊張が少しとけた気がします。各部屋での3次会では普段の学生生活を支えてくださっている学生課の方ともいろいろお話することができ意外な一面にふれました。

今回の合宿では単に医学を教えてくださる先生方ではなく、先に医学の道を歩んでこられた「私達の先輩」としての先生方に接することができ大変有意義だったと思います。文末になりましたが、この合宿研修を実行して下さった学生課・学務課の方々、先生方に改めて感謝いたします。

「2000年外国人学生のための進学説明会」に参加して

学生部 留学生課
専門員 阿部 滝

この度、9月10日(日)池袋サンシャインシティ文化会館で開催された、「2000年外国人のための進学説明会」に、本学は初めて参加しました。

この説明会は、(財)日本国際教育協会が主催するもので、東京会場の他大阪でも9月3日(日)に開催されました。開催趣旨は、各大学が日本国内において日本の大学等の高等教育機関への入学をめざしている外国人学生に、それぞれの目的に合った大学等を的確に選択し、入学準備が進められるよう最新の情報を提供して、来場した外国人学生が必要な情報を入手し、入学準備に取り組めるように個別の進学相談に応じるため、文部省の補助事業として、平成5年度より毎年開催されています。

今回、本学から学生部の東入学主幹、鈴木入学試験掛長と、私阿部(留学生課専門員)が当日説明に当たりました。

今回は、この東京会場に193の大学等(国立大学48、公立6大学、私立137、2機関)が参加し、来訪者数も3,409人と昨年より20%も増加(昨年2,813人)し、本学ブースにも48名の

方々が相談に訪れ、資料等を求めに来た外国人も多数あり、午後4時終了までに当初予定より来訪者が多く、予定した資料が不足したため大学に資料を取りに来たなど担当者は一日中嬉しい悲鳴でありました。

本学ブースを訪れた外国人学生の大半は、現在日本語学校に通っており、本学の大学院に入学を希望していました。また、主な質問内容は①大学院への入学手続き、②専攻生の入学時期、③専攻分野及び指導教官との連絡方法、④入学金・授業料、⑤奨学金の受給等が主な質問でありました。

今回、この外国人学生進学説明会に出席し感じたことは、本学ブースを訪れた外国人の大多数が中国国籍で、日本語学校に通い日本語を勉強した後、大学院に入学を希望している方々でしたので、国費留学生数の大幅な増加が望めないとすれば、私費留学生に対し本学の最新の情報をこの機会に、的確に伝えることも有意義と考えられるということです。



本学ブース風景

2000年度（後期）日本語教室開講

本学の留学生が、医・歯学を学ぶ上で基本的に必要とする日本語を習得し、研究活動に積極的に参加するための「日本語教室」を湯島地区の第4ゼミナール室、及び留学生センターにおいて開講しました。受講希望者はプレメントテストを受け、日本語能力に応じたクラス分けを行い、初級1・2、中級1・2・3・4、上級準備コース及び中級聴解1・2のクラス編制です。そのため10月11日（水）にプレメントテ

ストを行い、16日（月）から授業を実施しました。

留学生の皆さんは、忙しい合間を縫って一生懸命に勉強しています。

また、日本語のみならず留学生相互の親睦、情報交換、憩いの場として活用されています。

《開講期間》

平成12年10月16日（月）～平成13年2月9日（金）の15週



日本語補講（V・VI）湯島5号館4ゼミ YUSHIMA / 留学生センター CENTER

Place	Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
V - a (4ゼミ) YUSHIMA	4:30 - 6:00	B1 - 金山 Kanayama	M2 - 中川 Nakagawa	B1 - 北村 Kitamura	B1 - 北村 Kitamura	M1 - 北村 Kitamura
VI - a (4ゼミ) YUSHIMA	6:10 - 7:40	B2 - 金山 Kanayama	B3 - 金山 Kanayama	B2 - 北村 Kitamura	B2 - 北村 Kitamura	M4 - 北村 Kitamura
V - b (センター) CENTER	4:30 - 6:00	AC2 - 山下* (M3・M4) Yamashita	M1 - 串田 Kushida		AC1 - 鶴見 Tsurumi	
VI - b (センター) CENTER	6:10 - 7:40				Ad - 鶴見 Tsurumi	

B1 初級1 (Basic 1) 金山泰子・北村貫志
 B2 初級2 (Basic 2) 北村貫志・金山泰子
 M1 中級1 (Pre-Intermediate 1)
 北村貫志・串田紀代美
 M2 中級2 (Intermediate 2) 中川健司
 M3 中級3 (Intermediate 3) 金山泰子

M4 中級4 (Intermediate 4) 北村貫志
 Ad 上級準備 (Pre-Advanced) 鶴見千鶴子
 AC1 中級聴解1 (Aural Comprehension-Intermediate 1) 鶴見千鶴子
 AC2 中級聴解2 (Aural Comprehension-Intermediate 2) 山下早代子 (専任)

「日本語研修コース」開講式 留学生センター

平成12年度後期（第1期）日本語研修コースの開講式が、10月16日（月）午後2時から日本語研修生5名、鈴木学長をはじめ学内外の関係者16名が列席して本部会議室で行われた。

開講式は、鈴木学長の歓迎の挨拶で始まり、板橋留学生センター長の挨拶、日本語研修生の今後の抱負を交えた自己紹介と続き、最後に記念撮影を行い終了した。

本研修コースは、主に新規渡日の大使館推薦の国費留学生（研究留学生）を対象に、留学生活を送る上で必要な基礎的な日本語能力を身につけさせるため、6か月間にわたり日本語の集中教育を実施するもので、留学生センターの設置に伴い開設された。これまで本学に入学する国費留学生は、このような日本語研修を埼玉大学等で受講してきたが、これからは他大学に進学する医歯学専攻の国費留学生も含めて本学で実施することになる。

今回、第1期生として受け入れた5名の研修生は、トルコ、シリア、ギニア、ロシア、エジプトからの留学生で来年4月には本学（2名）のほか、東京女子医科大学（2名）及び和歌山県立医科大学（1名）にそれぞれ進学する予定である。



学長の歓迎の挨拶



記念撮影



自己紹介をする各留学生

平成13年度 **前期** 授業料免除申請受付

- 学部学生・大学院学生 -

1. 授業料免除について

- (1) 授業料免除制度は、経済的理由により授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀と認められる者、あるいは、学資負担者が死亡した場合や本人若しくは学資負担者が風水害等で災害を受けた場合に、授業料の納入が著しく困難と認められる場合に許可されるものであり、したがって申請しても必ず許可されるものではない。

収入が免除基準限度額内であり家庭状況についても免除制度の趣旨に適合するにもかかわらず、学業成績が基準に達しないために不許可となっている事例が少なからずあるので、普段から十分に注意することが必要である。

- (2) 修業年限を越えて在学する者及び留年している者は、免除の対象とはならない。

(留学・病気等特別の理由による者を除く。)

- (3) 授業料免除は、世帯の収入額に限度がある。

収入限度額は、所得の種類、世帯構成、自宅通学・自宅外通学、在学課程、奨学金受給等を考慮するので一概にいえぬ。収入の目安を例示すれば次のとおりである。

(例) 名古屋市在住で4人世帯

父 給与所得者 母 無職

本人 大学院生(博士)で自宅外通学・奨学金受給(117千円)

妹 自宅通学で私立大学生

全額免除収入限度額 約679万円(源泉徴収票の支払金額)

半額免除収入限度額 約816万円(")

2. 提出書類

- (1) 必ず提出する書類

①授業料免除申請書 ②授業料徴収猶予申請書 ③家庭調書 ④住民票 ⑤結果通知用封筒

- (2) 該当者のみ提出する書類

①成績証明書(該当者のみ)

②所得証明書 ③アルバイト等収入証明書

④兄弟等の授業料免除(国立学校のみ)の有・無の証明書(本学所定の用紙)

⑤父母が死亡・生別の場合は、戸籍謄本等の証明書

⑥その他の証明書類

3. 申請書類の受付期間

区 分		受 付 期 間		備 考
学 部 学 生	2～6年生	平成13年	3月14日(水)～3月22日(木)	3年次編入生を含む。
	1年生	平成13年	4月5日(木)～4月16日(月)	
大 学 院 生	2～4年生	平成13年	3月14日(水)～3月22日(木)	
	1年生	平成13年	4月5日(木)～4月13日(金)	
予備日	学部学生 大学院生	2～6年生	平成13年 4月13日(金)～4月16日(月) 17時(厳守)	受付期限後は受理しない。

注：平成13年4月1日現在の学年、私費外国人留学生を含む。

4. 申請書類の配布 用紙の配布は、平成13年2月上旬(予定)

5. 問い合わせ及び申請書類提出先

問い合わせ先	学生部厚生課	03(5803)5077	
提 出 先	学生部厚生課	医学科・歯学科	3～6年,
		保健衛生学科	2～4年, 大学院生
	教養部厚生掛	医学科・歯学科	1～2年, 保健衛生学科

学部だより

平成12年度 日本育英会奨学生推薦状況一覧

平成12年6月30日現在

区分	学科等	予約採用		推薦内示数			応募者数及び推薦者数														
		第1種	第2種	1年生	2年生以上	計	第1種			第2種			第3種			計					
							1年生	2年生以上	計	1年生	2年生以上	計	1種	2種	3種	1種	2種	3種	計		
																				1種	2種
学部	医学科	0	2			9	13	8	3	10	8	(8)	6	2	2	12	12	6	2	2	16
	歯学科	0	0	8		4		4	4	12	12	(5)	4	1	1	6	6	4	1	1	17
	看護学専攻	2	0		1	8	15	4	4	6	6	(6)	6	3	3	6	6	6	3	3	15
	検査技術学専攻	2	1	4		7		7	7	6	5	(11)	8	0	0	6	6	8	0	0	13
	(緊急採用)	-	-	-	-	2	2	2	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	1	1
合計	4	3	12	1	30	14	19	2	49	16	34	(30)	24	7	7	31	(30)	24	7	41	62
大学院	医学系研究科(博士)	-	-			0			3	-	-					-	-				-
	歯学研究科	-	-	(49)		0	109	107	4	4	116					-	-				-
	歯学部総合研究科	-	-			109		0	0							-	-				-
	医学系研究科(前期)	-	-	7	1	13	7	1	1	14	8	1	(7)	2	2	1	1	(7)	2	1	4
	(緊急採用)	-	-	-	-	1	1	1	0	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
医学系研究科(後期)	-	-	3	3	3	3	1	0	4	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
合計	-	-	(60)	6	126	118	9	8	135	126	1	(7)	2	2	1	1	(7)	2	1	3	4
総計	4	3	(73)	68	156	132	28	10	184	142	35	(37)	26	9	8	32	(37)	26	8	44	66

注：() は、当初の推薦内示数。

平成13年度入学者選抜

「本学の学生としてふさわしい人格・識見ともに優れた人材を選抜する」ことを目的として、本年度も入学者の選抜試験を実施します。

実施に当たっては、例年同様、教職員の皆様方に協力要請をお願いする予定でありますので、ご協力方よろしくお願いいたします。

また、医学部保健衛生学科看護学専攻の推薦入学選抜（特別選抜）は、75名の出願があり、第一次選考及び第二次選考を行い、12月7日（木）に最終合格の発表が行われました。

募集要項の配布

私費外国人留学生募集要項（特別選抜）は10月16日から、一般選抜の募集要項は12月1日からそれぞれ配布しております。

また、出願受付は私費外国人留学生（特別選抜）が12月11日（月）から18日（月）午後5時必着）まで、一般選抜は来年の1月29日（月）から2月6日（火）までとなっております。

テレホンサービス

平成13年度入学者選抜に関するテレホンサービスの内容は、前期日程及び後期日程試験を区分し、次のとおり行っています。

1) 電話番号

前期日程試験関係 03 5803 5085

後期日程試験関係 03 5803 5086

2) 提供期間・内容等

案内事項	提供期間		サービス内容等
	前期	後期	
1) 募集要項選抜日程等	10月1日～1月28日	10月1日～1月28日	要項請求方法、学生募集概要、選抜試験実施日程
2) 志願状況	1月29日～2月12日	1月29日～2月27日	募集定員、志願者数、志願倍率
3) 2段階選抜の状況 個別学力検査案内等	2月13日～2月27日	2月28日～3月13日	第1段階選抜実施状況、学力検査、面接、小論文試験等の時間割、会場等、注意事項
4) 合格発表日時 入学手続案内等	2月28日～3月9日	3月14日～3月26日	発表日時・場所、入学手続
5) 追加合格日時等	3月10日～3月31日	3月27日～3月31日	追加合格日程

平成13年度4月期国際交流会館の入居募集

外国人留学生、研究者の皆さんが本学での教育・研究の交流の場と生活の場となる施設（国際交流会館）の4月期入居募集を下記の要領で行います。

1. 応募資格

- (1) 外国人留学生（平成13年4月期からの入居を希望する者）
 - (2) 外国人研究者（平成13年4月から9月までの間に入居を希望する者）
- イ．外国人研究者招聘のため等による、6か月以上先の期間における入居申請は受

け付けません。

ロ．申請時に本人が出願できない場合（本人が来日していない場合等）は代理者による申請を認めます。

ハ．入居期間は、外国人留学生は1年以内、外国人研究者は3週間以上1年以内です。

(3) 入居申請書受付期間

平成13年1月22日（月）～1月30日（火）

* 入居申請書配布及び入居申請受付は学生部留学生課において取り扱います。

なお、詳しくは学生部留学生課窓口でお尋ねください。

平成12年度定期健康診断結果

保健管理センター 所長 谷 合 哲

平成12年度の定期健康診断は、教養部の学生及び職員を4月18日に教養部で行いました。レントゲン車を構内におき、野外を順路とするので天候が心配でしたが、幸いよい天気恵まれ順調に終了しました。湯島地区及び駿河台地区の学生、職員は5月9日から5月11日までと、5月16日から18日までの2週間にわたって、5号館の保健管理センターと周辺のゼミナール室を使って行われました。レントゲン検査は医学部附属病院の放射線技師の方々をお願いし、学生部厚生課職員と人事課の職員掛を中心として多くの方々のご支援のもとに、保健管理センター職員総出で、順調に行われました。

今年度の受診者数は表に示すように、学部学生1011名、受診率77.5%、大学院・専攻生681名、39.2%、附属学校120名、99.2%、職員1235名、46.6%、他に一部の項目を受診したものの50名を合わせて、総数3097名、53.3%で、総数としては例年とあまり変わりませんが、一部の学年に例年には見られないほどの低率の学年がありました。一般的な傾向として学部に入って2～3年目の学年で低率になるようです。近年結核が再興感染症として急速に増加の傾向が見られます。幸い本年の受診者の中からは結核の発病者はいませんでした。定期健診を受診しなくなるということは、健康に関心になってきている可能性があり、このような人の中から結核の発病が出るのではないかと心配です。最近結核の発病が増えているばかりでなく、事業所や学校における集団感染が増えています。さらに医療機関における集団感染も増えています。最近の若年者層には結核に対する免疫力が低下しているといわれています。定期健診を受

けることにより、集団感染の可能性が低下します。定期健診をぜひ受診するようにして下さい。たまたま受診できなかった人も、普通のかぜとは違う発熱が続いたり、繰り返しかぜをひいたときには必ずレントゲン検査を受け、結核ではないか確実な診断を受けて下さい。結核の早期発見は集団感染を予防するためには重要です。

このほか血圧が高い人、検尿で異常のある人が大勢いました。そのような人には各自に連絡をして再検査をしてもらい、再度異常が出た人はその後も経過観察をしたり、内科受診をすすめたりしています。

本年度の定期健康診断からは図のように、身長・体重測定、血圧測定、視力測定をすべて全自動、無線送信システムで実施しました。このシステムの導入とバーコードカードシステムを組み合わせ、自動化できるところは極力自動化することができ、保健管理センター職員はできるだけ健診の状況のみまわり、測定法や結果の指導にまわることができました。このような無線送信システムは、まだ大学の集団検診に導入しているところがなく、全国保健管理センターの研究集会で報告したところ大変良い方法だということで注目されました。このシステムの導入に当たり、ご理解とご支援を頂いた方々に感謝いたします。ただこのシステムが有効に機能するためには、皆様に受診の際保健管理センターカードを持参していただくことが必要になります。定期健診以外でもカードを使うことによりシステムの機能を有効に使うことができます。受診の際ぜひカードをご持参して下さい。

定期健康診断は健康管理の第1歩です。ぜひ受診して健康な大学生活を送って下さい。

平成12年度 定期健康診断受診状況(学生)

教養部

部 局	在籍数	胸部 X 線間接撮影				血 圧				検 尿			
		受 診 者		要再検者		受 診 者		要再検者		受 診 者		要再検者	
		件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)
医学科1年生	77	73	94.8	0	0	73	94.8	14	19.2	73	94.8	6	8.2
医学科2年生	84	75	89.3	1	1.3	75	89.3	11	14.7	75	89.3	4	5.3
看護学1年生	50	50	100.0	1	2.0	50	100.0	3	6.0	50	100.0	6	12.0
検査学1年生	32	31	96.9	0	0	31	96.9	2	6.5	31	96.9	4	12.9
歯学科1年生	55	53	96.4	1	1.9	53	96.4	15	28.3	53	96.4	6	11.3
歯学科2年生	60	54	90.0	0	0	54	90.0	11	20.4	54	90.0	6	11.1
小 計	358	336	93.9	3	0.9	336	93.9	56	16.7	336	93.9	32	9.5

医学部

医学部 医学科	3	95	67	70.5	0	0	68	71.6	7	10.3	68	71.6	4	5.9
	4	83	23	27.7	1	4.3	23	27.7	1	4.3	23	27.7	0	0
	5	86	65	75.6	1	1.5	65	75.6	3	4.6	65	75.6	4	6.2
	6	86	77	89.5	2	2.6	77	89.5	10	13.0	77	89.5	8	10.4
保健衛 生看護	2	56	41	73.2	1	2.4	41	73.2	2	4.9	41	73.2	4	9.7
	3	61	29	47.5	1	3.4	29	47.5	0	0	29	47.5	4	13.7
	4	56	54	96.4	1	1.9	54	96.4	0	0	54	96.4	2	3.7
保健衛 生検査	2	28	22	78.6	0	0	22	78.6	0	0	22	78.6	2	9.1
	3	45	17	37.8	0	0	17	37.8	1	5.9	17	37.8	1	5.9
	4	39	36	92.8	1	2.8	36	92.3	1	2.8	36	92.3	5	13.9
小 計	635	431	67.9	8	1.9	432	68.0	25	5.8	432	68.0	34	7.9	

歯学部歯学科

歯学部 歯学科	3	81	76	93.8	1	1.3	76	93.8	6	7.9	76	93.8	11	14.5
	4	77	29	37.7	1	3.4	29	37.7	0	0	29	37.7	2	2.6
	5	73	60	82.2	0	0	61	83.6	4	6.6	61	83.6	4	6.6
	6	81	79	97.5	3	3.8	79	97.5	2	2.5	79	97.5	9	11.4
小 計	312	244	78.2	5	2.0	245	78.5	12	4.9	245	78.5	26	10.6	

附属学校

科衛生 学校	1	31	31	96.8	1	3.3	30	96.8	1	3.3	30	96.8	2	6.7
	2	27	27	100.0	0	0	27	100.0	1	3.7	27	100.0	4	14.8
工士校 (本)	1	20	20	100.0	0	0	20	100.0	0	0	20	100.0	3	15.0
	2	20	20	100.0	0	0	20	100.0	1	5.0	20	100.0	4	20.0
工士校 (実)	1	12	12	100.0	0	0	12	100.0	0	0	12	100.0	0	0
	2	11	11	100.0	0	0	11	100.0	0	0	11	100.0	0	0
小 計	121	120	99.2	1	0.8	120	99.2	3	2.5	120	99.2	13	10.8	

大学院・専攻生

大学院生	844	475	56.3	14	2.9	473	56.0	25	5.3	473	56.0	60	12.7
専攻生	892	206	23.1	4	1.9	206	23.1	13	6.3	206	23.1	30	14.6
小 計	1736	681	39.2	18	2.6	679	39.1	38	5.6	679	39.1	90	13.3

学生合計

合 計	3162	1812	57.3	35	1.9	1812	57.3	134	7.4	1812	57.3	195	10.8
-----	------	------	------	----	-----	------	------	-----	-----	------	------	-----	------

学生部だより

平成12年度 定期健康診断受診状況（職員）

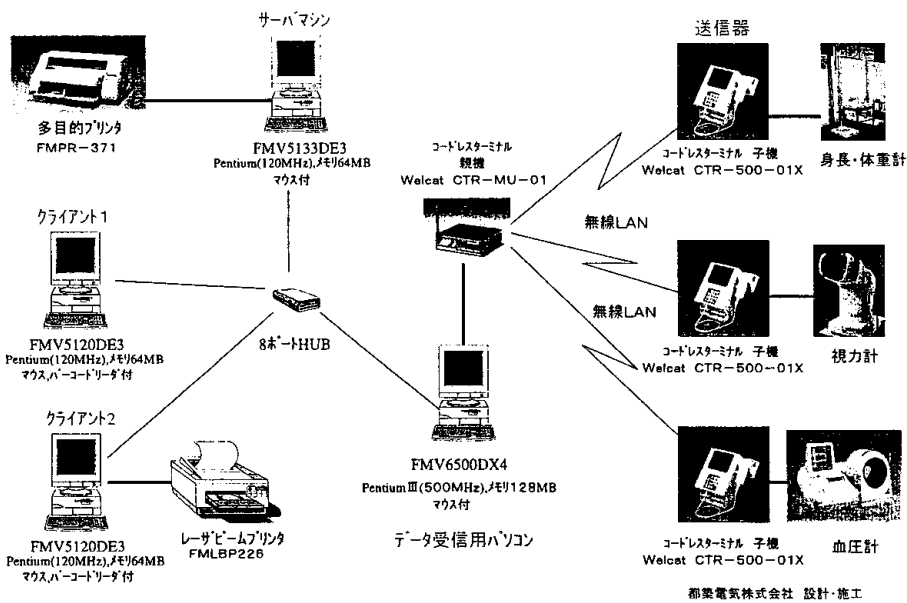
職員

部 局	在籍数	胸部 X 線間接撮影				血 圧				検 尿			
		受 診 者		要再検者		受 診 者		要再検者		受 診 者		要再検者	
		件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)
本部等	192	52	27.1	4	7.7	53	27.6	9	17.0	53	27.6	11	20.8
医学部	106	79	74.5	2	2.5	83	78.3	7	8.4	83	78.3	9	10.8
歯学部	51	51	100.0	6	11.8	51	100.0	8	15.7	51	100.0	9	17.6
医学部病院	981	423	43.1	9	2.1	421	42.9	27	6.4	430	43.8	78	18.1
歯学部病院	437	217	49.7	13	6.0	228	52.2	16	7.0	225	51.5	31	13.8
教養部	39	15	38.5	0	0	16	41.0	3	18.8	16	41.0	0	0
材 研	66	17	25.8	0	0	19	28.8	7	36.8	19	28.8	4	21.1
難 研	131	38	29.0	4	10.5	40	30.5	9	22.5	40	30.5	15	37.5
共教センター	39	14	35.9	0	0	14	35.9	0	0	14	35.9	2	14.3
大学院	606	155	25.6	3	2.0	158	26.1	18	11.4	158	26.1	13	8.2
合 計	2648	1061	40.4	41	3.9	1083	40.9	104	9.6	1089	41.1	172	15.8

その他

部 局	在籍数	胸部 X 線間接撮影				血 圧				検 尿			
		受 診 者		要再検者		受 診 者		要再検者		受 診 者		要再検者	
		件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)	件数	率(%)
和 同 会		71		7	9.9	27		27	37.5	72		29	40.3
生 協		10		1	10.0	11		7	63.6	11		8	72.7
医科同窓会		3		0	0	3		1	33.3	3		0	0
歯科同窓会		8		0	0	8		0	0	8		2	25.0
合 計		92		8	8.7	94		35	37.2	94		39	41.5

東京医科歯科大学保健管理機器構成図



宿 泊 施 設 案 内

南房総へ花摘みに行きませんか！

館山大賀寮

所在地 千葉県館山市大賀無番地

施設 ①収容人員 53名 ②宿泊室 12室 ③研修室 2室 ④テニスコート 1面 ⑤駐車場

交通 JR(東京駅 - - 内房線 特急 - - 館山駅) 1時間50分

マイカー(首都高・アクアライン・富津館山道路) 2時間30分

経費 宿泊費 700円, 食費 1,400円(夕朝), 暖房費 200円

使用申込・問い合わせ 学生部厚生課 TEL 03 - 5803 - 5079

みどころ・催事等

①花摘み 温暖な花畑には、色鮮やかな花が咲き乱れます。



ポピー, ストック, 菜の花, キンギョソウ, キンセンカ(12月~4月)

さざんか, すいせん (1月)

マーガレット, うめ, つばき (2月~3月),

さくら, つつじ (4月)

(問い合わせ: 館山市観光協会 TEL 0470 - 22 - 2000)

②いちご狩り

真っ赤に熟したイチゴは、甘くて新鮮です。

1月上旬から5月上旬まで楽しめます。

(問い合わせ: 館山市観光協会 TEL 0470 - 22 - 2000)

③館山若潮マラソン大会

毎年1月の最終日曜日に開催されます。

(問い合わせ: 館山市教育委員会 TEL 0470 - 22 - 3111内652)

赤倉でシュプールを描きませんか！

妙高高原赤倉寮

所在地 新潟県中頸城郡妙高高原町赤倉温泉

施設 ①収容人員 38名 ②宿泊室 7室 ③ゲレンデまで1分 ④町営駐車場まで2分

交通 JR(東京駅 - - 長野新幹線・信越線 - - 妙高高原駅) 2時間30分

マイカー(関越・上信越自動車道路) 3時間30分

経費 宿泊費 700円, 食費 1,450円(夕朝), 暖房費 200円

使用申込・問い合わせ 学生部厚生課 TEL 03 - 5803 - 5079

スキーシーズン中は利用者が集中しますので、抽選となることがあります。

みどころ・催事等

2000ホワイトクリスマス in 新赤倉 12月23日

妙高杉ノ原どんど焼・雪上花火大会 1月13日

2001池の平かまくらカーニバル 3月19日

この他たくさんの行事が開催されます。

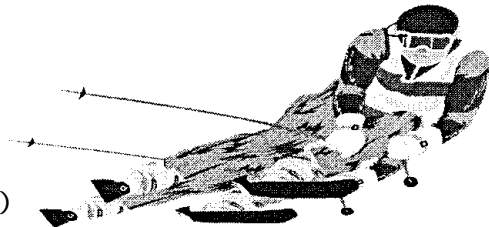
(問い合わせ: 妙高高原町 TEL 0255 - 86 - 3131)

ゲレンデ情報

妙高山麓に無料シャトルバス新登場!(赤倉温泉~妙高杉ノ原スキー場間)

積雪情報, ゴンドラ情報, 天候情報が妙高高原町ホームページで見られます。

<http://www.myoko-kogen.or.jp>



(問い合わせ: 妙高高原町 TEL 0255 - 86 - 3131)

学生サークル組織状況

本学の学友会には、体育系や文科系のクラブ、あるいは同好会が多数あって、個性を磨き育成する場として、また人間形成の場として、重要な役割を果たしています。下記の表は、各サークルの組織状況を示すものです。

《東京医科歯科大学学生サークル組織状況》 (平成12年11月1日現在)

サークル名	顧問 教 官	部員数	部員の内訳					サークル名	顧問 教 官	部員数	部員の内訳				
			性別		学科別						性別		学科別		
			男	女	医	歯	保				男	女	医	歯	保
文化系【14サークル】							卓 球 部	湯浅保仁直 鈴木直	10	6	4	4	6	0	
English Speaking Society	丸茂文昭	13	12	1	8	4	1	ラ グ ビ ー 部	峰下 哲	33	24	9	11	14	8
お茶の水管弦楽団	桶田理喜彦 田中智彦	61	23	38	28	20	13	男子バスケットボール部	山下靖雄	22	16	6	9	6	7
混声合唱団	井上昌次郎	10	5	5	5	2	3	女子バスケットボール部							
美術部	神奈木真理	18	5	13	10	*7	1	サッカー部	黒田敬之	38	24	14	14	9	15
写真部	今井孝祐	11	8	3	6	5	0	男子バレーボール部	北川昌伸 河野辰幸	46	20	26	12	*18	16
茶道部	高木 実	29	9	20	14	11	4	女子バレーボール部	眞野喜洋	30	0	30	2	11	17
演劇部	船越浩海	21	8	13	7	5	9	山 岳 部	丸茂文昭	10	5	5	5	3	2
公衆衛生予防医学研究会	田中平三	10	6	4	4	2	4	競技スキー部	中村泰尚	27	18	9	13	13	1
Modern Jazz Diggers	天笠光雄	43	28	15	16	19	8	水 泳 部	田邊 勉	50	28	22	20	16	14
コンピュータクラブ	佐藤健次	13	11	2	5	5	3	ワンダーフォーゲル部	佐藤健次	27	18	9	9	5	13
文芸部								バドミントン部	和田 勝	60	26	34	23	14	23
手話サークル	島内 節	19	1	18	2	1	16	ヨ ッ ト 部	佐藤達夫	7	7	0	3	4	0
国際学生交流会 S.S.I.A.	江藤一洋 山本直樹	40	20	20	23	16	1	ハンドボール部	布施善克	15	11	4	6	7	2
Tokyo Medical & Dental Piano Clubピアノの会	西岡 清	57	21	36	30	13	14	ゴ ル フ 部	眞野喜洋 榎本昭二	31	20	11	16	14	1
体育系【26サークル】							陸上競技部	水野哲也	29	20	9	16	10	3	
漕艇部	黒崎紀正 布施善克	29	13	16	10	2	17	ウィンドサーフィン部							
躰道部	天笠光雄	17	11	6	11	3	3	スキューバダイビング部	眞野喜洋	36	19	17	13	17	6
柔道部	坂本忍也 石田哲也	19	13	6	8	6	5	同好会【4サークル】							
剣道部	宮坂信之 高野健人	20	11	9	5	9	6	彫金アクセサリー同好会	相馬邦道	14	5	9	5	7	2
弓道部	丸茂文昭 海野雅浩	29	16	13	10	12	7	モンナニF.C. TMDU Footsal Team	佐藤達夫	11	9	2	3	6	2
硬式庭球部	江藤一洋 四宮謙	55	24	31	28	19	8	総合レジャー同好会	水野哲也	20	12	8	5	11	4
軟式庭球部	平岡昌和 水野哲也	51	29	22	18	17	16	アメリカンフットボール同好会	土田信夫	22	17	5	5	17	0
硬式野球部	一條秀憲	24	18	6	9	9	6								

* 附属学校生を含む。

サークル紹介

【ラグビー部】



ラグビー部と聞くと良いイメージとしては

- 男らしい ○団体スポーツなので協力的になれる ○ストレス発散になる
- また、悪いイメージとしては
- 痛い ○ケガ ○汗くさい ○上下関係 ○ごつい ○体格に不安 ○疲れる ○医科歯科は弱そう etc

書けばきりが無いぐらいの多さですが、実際に僕が入部したときもこれらのことは感じました。しかし、実際にプレイしてみると、確かに痛いし汗くさいがこれは別にラグビーだからというものではなく他の部でも感じる程度のものであり、疲れるというのもほどほどに疲れる程度

です。また、今年から根性練みたいない精神的に苦痛な練習はなくなり、科学的に練習するのでケガの心配もなく、部の大多数が大学に入って初めたので初心者でもまったく心配ありません。また、体格も医歯薬という狭い範囲での活動であり、ポジションも様々あるので気にする必要はまったくありません。また、部の雰囲気もとてもアットホームでバイトの紹介、当然、飲み食いのオゴリなど優しい人たちばかりです。

(M6 竹林 裕直)

【陸上部】

「陸上」と聞くとみなさん、どのようなイメージですか？「ただ、走るだけで、つまらない。」「つらそう。」「中高生のやるスポーツ」などと思われるかもしれませんが、私達、東京医科歯科大学陸上部は、健康のためにやっている人から、バリバリやっている人まで、みんなでアットホームな雰囲気の中、練習しています。

シーズンは、5月から10月で、約8大会ほど参加し、少数ながら、好成績をおさめています。また、冬には、マラソン大会、駅伝にも参加しています。

全体として女の子の数も多く、フィットネス感覚でやっている、部員も数多くいます。

また、練習、合宿などは、他校と行う機会が多く、交流が盛んなのも、私達、陸上部のウリです。

陸上は、シューズとジャージさえあれば、誰にでもできる最もシンプルなスポーツです。ダイエットしたい人から、本格的に記録に挑みたい人、走りたくて走りたくて仕方がない、ちょっとマゾチックな人まで、是非、私達、陸上部を見に来てください。

【今シーズンの主な結果】

6月 全関東医歯薬獣：
男子 総合3位 トラック2位

8月 ALL DENTAL：
男女 総合6位 トラック3位

10月 関東医科：
男子 総合5位 トラック6位
女子 総合5位 トラック5位

(M5 野村尚弘)



【美術部】

美術部の活動の特徴は、やはり何といても自由であるということです。曜日と×曜日にはどこそこに集まって練習のようなことはありません。美術部に入ったきっかけも人それぞれです。

本格的に絵を描きたくて入部した人、少し興味があつてのぞいてみようという人、友達に誘われた人、美術館見学が好きな人……。

自由で、しかも多種多様な人が集まる美術部。

もし少しでも絵や彫刻に興味がある方はぜひ美術部をのぞいてみて下さい。きっと楽しい先輩があなたを待っていますよ。

美術部に入った後で本格的に絵を描き始めようと決意したとしても教えてもらおうと思えば教えてくれる人はたくさんいます。

普段は飲みに行ってふざけている印象しかないような先輩や同級生が美術展になると、驚くような絵を発表してはっとさせられることもしばしばあります。

あなたも美術部に入って美術の世界を少しのぞいてみませんか？

(M5 しのはら まふみ
篠原真史)

【公衆衛生予防医学研究会】

私たち“公予研”は、本学唯一の医療系サークルです。

私達のウリは、とにかくアットホームなところ！部会が始まる前には、先輩・後輩の隔たりを感じないくらいの楽しいおしゃべりが繰り広げられ、一番年下の私もホッとできるひとときです。ところが！一度部会が始まると部員の目つきは変わり、真剣な話し合いが交わされます。もちろん、後輩が先輩に質問することもできますし、先輩からは愛のこもった(?)ありがた〜いアドバイスを頂けます。専門的な勉強や臨床実習をされている先輩方のお話は、教養生にはとてもよい刺激になりますよ。

そして、そんなあつい部会が終わるとみんなで食事をしてから帰りますが、このときもなかなかおしゃべりは止まりません。

日頃の努力の成果でしょうか、昨年学祭のときに発行した研究報告書は予備校や高校など外部の団体からも大好評でした。

毎週水曜日、5号館5F一番奥ではこんなことが行われているのです。“ためになってしかも楽しい”公予研をどうぞよろしく。

(M4 せ とくちまさひこ
瀬戸口雅彦)



月経の異常と その対応について

インタビュー
谷合 哲 (保健管理センター所長)

急に具合が悪くなって保健管理センターに来られる方のうち、生理痛や生理不順を訴えてくる方が大勢います。本学の学部学生はおよそ1300名で、そのうち女子学生がちょうど半分になっており、生理不順や生理痛に悩まされている方も多いと思います。そこで今回は大学院医歯学総合研究科、生殖機能協関学分野の教授で医学部産科婦人科学教授を併任されておいでになる麻生武志先生に、月経周期や月経痛について伺いました。



麻生武志 教授

大学院医歯学総合研究科
生殖機能協関学分野・
産科婦人科学

月経が規則的な周期で繰り返し起ることは女性の心と身体が成熟し健全である証で、そのためには中枢(視床下部)・下垂体・卵巣・子宮で形成される機能システムが正常に稼働しなければなりません。しかしこのシステムは非常にデリケートで種々の要因の影響を受けて失調を来します。例えば不規則な生活習慣(睡眠, 食事など)や、環境の変化, ストレスなどで周期が乱れたり, 不正な出血が続いたり, または月経が止まる(無月経)ことがあります。不眠に悩んだり, 短期間に体重が急激に減少または増加するなどの症状などがありますと, 特に18歳前後でまだこのシステムが完全に確立されていない時期には強い要因となって月経の異常を来すことが多くなります。一方, 月経の始まる前や始まった直後に強い下腹の痛み, 腰痛, 脚のむくみや冷感, いらいらなどの症状が現れ, 日常生活に支障を来す場合があります。その背景

健

康

コ

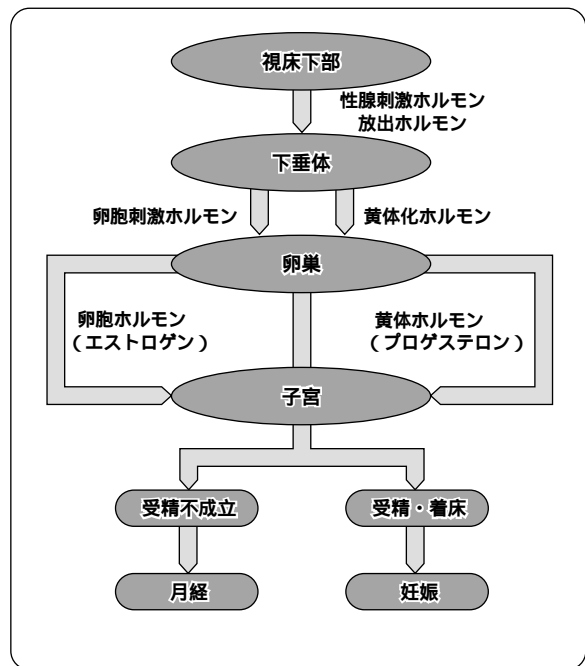
ラ

ム



このコーナーを担当
していただく
保健管理センター所長
谷合 哲 教授

には卵巣から分泌されるホルモンのバランスの乱れや子宮の発育不全が原因となり、骨盤内の微小な血管を流れる血流が滞るために起ると考えられています。また、子宮・卵管周囲に感染が起り炎症が長期化する場合にも起ります。最も大きな問題となるのは最近増えている子宮内膜症で、子宮内腔(面)のみに本来存在する子宮内膜が異所性に骨盤内の臓器(卵巣, 子宮を支持する靭帯, 腹膜面など)や子宮筋層内へ広がり、その部で月経の度に出血するために発症後の時間経過と共に病巣が拡大し、月経困難症と言われる月経直後の症状が次第に増強します。また進行すると不妊の原因にもなりますので事は重大です。以上の月経異常の原因は多岐にわたり、中には将来に障害を残すこともありますので、自分だけで悩まないで対応についてのアドバイスを受けて下さい。その際には生活習慣の適正化に努めると共に、基礎体温を記録し、月経のパターンと症状との関連を検討すれば異常の鑑別に有用で、その記録(少なくとも4週間以上の)を持って専門医に相談すれば適切な対応を早く見つけることもできます。



図：月経周期をコントロールするシステム



東京医科歯科大学

お茶の水祭 00

10月21日・22日



行事案内・掲示板 原稿募集

原稿や写真（表紙含む。主に本学を題材にしたもの。）を募集しています。

行事案内・掲示板の欄は職員、学生、皆さんのページです。研究会、講演会、セミナー、特別講義、サークルの行事などの開催案内、その他にご利用下さい。

なお、本欄掲載事項に関する照会等への対応は、利用者の責任において行って下さい。

行事案内は、集会名等：日時/講師（所属）/演題等/場所/連絡先（所属・氏名・電話内線番号等）の要領で、その他の掲示板は原則として100字程度をお願いします。

原稿は広報委員あるいは庶務課 1号館2階 内線5008、Eメール hiroba@tmd.ac.jp（Information, Topicsを明記）までお願いします。

発行予定日は3、6、9、12月です。該当月の1ヶ月前までにお届け下さい。

広報委員会委員

一條秀憲（歯学部）
海野雅浩（学生部長）
大谷啓一（歯学部）
岡部繁男（医学部：委員長）
渡橋正博（事務局長）
北嶋繁孝（難治疾患研究所）
松岡 恵（医学部）
水野哲也（教養部）
宮入裕夫（生体材料工学研究所）
事務担当 庶務部庶務課

医歯大ひろば No 81

編集 東京医科歯科大学広報委員会
発行 東京医科歯科大学庶務部庶務課
〒113 8510
東京都文京区湯島 1 5 45
Tel 03(5803)5008
Fax 03(5803)0100

本学ホームページアドレス <http://www.tmd.ac.jp>
広報委員会、医歯大ひろばに関する投稿、ご意見、
セミナー等開催のご案内は
メールアドレス hiroba@tmd.ac.jp



本紙は再生紙を使用しています。

国府台散策

江戸川の「矢切^{やぎり}の渡し」から「野菊の墓文学碑」まで、田園風景が続きます。12月のよく晴れたお昼休みに散策してみました。



細川たかしの筆による石碑です



12月は人出の多い日だけ運行されます



ビルの並ぶ対岸は東京都葛飾区です



堤防の草はまだ青々としています



堤防を降りると畑が続きます



碑文は伊藤左千夫「野菊の墓」の一節です

「国府台散策」は今回をもちまして連載を終了します。ご愛読ありがとうございました。

(構成・写真/教養部 日置 俊次)